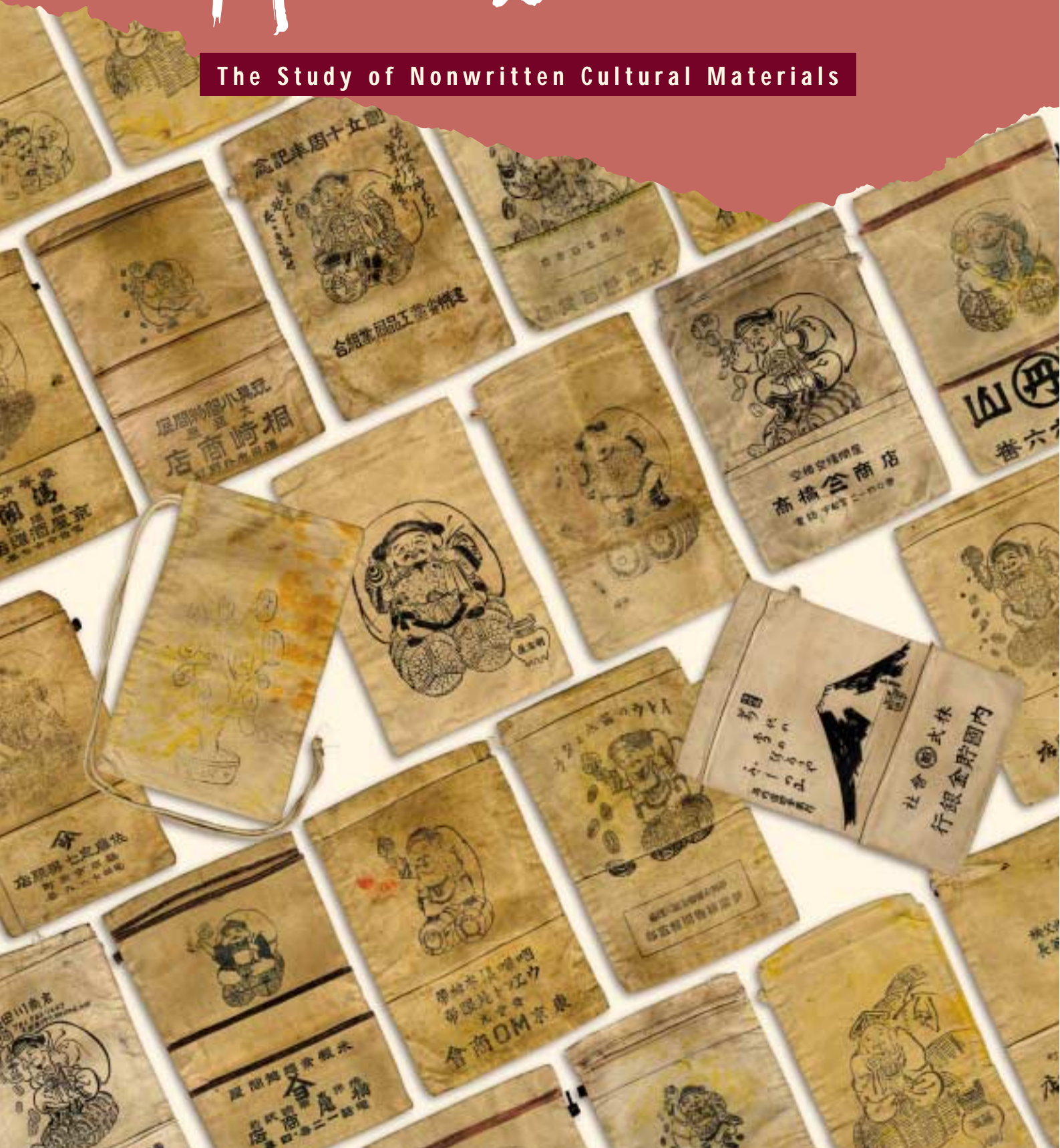


非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

NewsLetter

2006.9
No.13

CONTENTS

展示を考える1

What Is a Museum Exhibition?

展示と体験 3

“Exhibition”and“ Experience ”at Museums
榎 美香 ENOKI Mika

観覧料という心的バリア 5

How Is the Fee Decided?
浜田 弘明 HAMADA Hiroaki

第2回国際シンポジウムにむけて

An Invitation to the Second International Symposium
on Nonwritten Cultural Materials

画像・民具・景観 8

非文字資料から人類文化を読み解く
Interpreting Human Culture through Nonwritten Materials :
Perspectives on Illustrated Material, Folk Implements and
Landscape

大里 浩秋 OSATO Hiroaki
的場 昭弘 MATOBA Akihiro
金 貞我 KIM Jeong Ah
河野 通明 KONO Michiaki
八久保 厚志 HACHIKUBO Koshi
北原 系子 KITAHARA Itoko

プログラムスケジュール 16

コラム Column 17

アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカの情報発信(展示)
の発達比較 日本から一番遠い国、ブラジルでは
大西 万知子 ONISHI Machiko

2005年度外部評価と対応策 18

An Auditors Report of Our Project and Our Response to It
委員の評価(要旨)
外部評価に対する対応策

コラム Column 22

忘れられない二週間
王 欣 WANG Xin

コラム Column 23

中国の吉祥図案と日本の吉祥図案の比較研究
尹 笑非 YIN Xiofei

主な研究活動 24

1班『東アジア生活絵引』編纂 公開研究会報告 26
楊貴妃になりたかった男たち 『点石齋画報』に見る「女裝くん」
佐々木 睦 SASAKI Makoto

立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム 27

ジョイントワークショップを了えて
北原 系子 KITAHARA Itoko

受贈資料一覧 28

コラム Column 30

インドにおけるフィールドワークの実践
國弘 暁子 KUNIHIRO Akiko

彙報 31

Information 32

表紙
写真
説明



呪力としての絵

ここにならんでいるのは、かつて商店が得意先に配った木綿の財布である。その図柄は、金の成る木を模したもの()や富士山()などもあるが、多くは商売繁盛を願って大黒様の姿である。こうならべてみると、サービスで配布された品ではあるが、祈りの真摯さと、また使い込まれた財布の汚れから汗や苦労のにおいとが伝わってくるように思う。

秩父町世界牛肉店配布のもの 寒川町倉見の米穀肥料商藤澤商店配布のもの 京屋酒造店配布のもの 酒田市外野町の玩具小間物問屋大盛屋桐崎商店配布のもの 遠州笠置工品同業組合の創立十周年記念のもの 久那土(一字不明)校前大黒屋百貨店配布のもの 鶴岡市南町佐藤定七呉服店配布のもの 秩父市駅前通りスモカ歯磨代理店玩具雑貨卸商辰巳屋本店配布のもの 明治屋配布のもの 東京千秋自転車工場のもの 宇都宮空樽空壇問屋高橋商店配布のもの 大山(商店か)配布のもの 蒲田東口駅前麻袋布袋紙袋加工販売柳商店配布のもの(「福田川商店」と記されているのは使用者の名と思われる) 播州東嶺崎駅前米穀素齋問屋横尾商店配布のもの 咽喉温布綿布帯ウエット片眼帯発売元東京MO商会配布のもの 静岡市彌勤公園正門前伊藤植物園種苗部配布のもの 株式会社内國貯金銀行配布のもの 伊那町たけや呉服店配布のもの 肥料商八木商店配布のもの (香月 洋一郎)

展示を考える1

What Is a Museum Exhibition?

来年度の実験展示の実施に向けて、今年度からその作業班が編成されました。本号とこれからの号で、そのスタッフのいく人かの方から、各々の展示への想いを述べて頂きます。

展示と体験

榎 美香 (千葉県立中央博物館歴史学研究所 上席研究員 / 共同研究員)

“Exhibition” and “Experience” at Museums

ENOKI Mika

博物館 (Museum) は今日、公的教育機関という性格を持っているが、その最初の出発点は16~18世紀ヨーロッパの上流階級による私設コレクションであった。王侯貴族や上流紳士達が大航海時代を背景に収集した、異国の珍しい物品・動植物を陳列し、見せる (展示する) ためのスペースであったのだ。したがって、当初は来館者へのサービスよりもむしろオーナー側の意向や趣味を反映し、一種マニャックな性質のものであった。その動機のひとつは未知の異世界に対する好奇心である。外国の文化や文物、風俗習慣だけでなく、「都会」の人間にとっては、「辺境地」のそれもまた、やはり物珍しい興味の対象となり得たのである。日本においても、近世後期には都市部の好事家達は仲間内で見せあうことを目的に、競って名品、珍品を収集するようになった。その背景には紀行文や名所図会が広く流布し、一般の人々の間に他地域への関心が高まっていたということもあるだろう。

民俗学という学問もまた「自文化への回帰」という思考ルートを学問的根拠としつつも、やはり当初の動機付けとして中央から見た異文化への興味という一面があることは否めない。大正7年に渋沢敬三がはじめはごく個人的につくったアチックミュージアムなどもこうした流れの中に位置づけられよう。しかし、その後、系統的な博物館の基本的機能が整備されるようになると、各地域においても自文化の独自性を示すための博物館が作られるようになる。特に高度経済成長期の前後には地域に残された歴史史料や民俗資料の重要性が広く認識されるようになり、地域博物館・資料館の数は急増する。

また、近年は博物館の役割として、資料を扱うだけでなく、来館者への教育普及活動が重視されるようになってきている。これは博物館が公的な社会教育機関として位

千葉県立房総の むらの「体験」



上から

「上総の農家」の「サナブリ」

「上総の農家」の「虫送り」

「鍛冶屋」の「親子鍛冶屋教室(文鎮などを作る)」

「下総の農家」の「人形送り」



置づけられるようになった当然の結果でもあろう。かつての陳列・放任主義ではなく、博物館はそこに展示する「資料」の意味について、見る人たちに説明する義務を負うようになった。「資料」とは、ただそこにあるからといって資料になるものではなく、何らかの価値観が付加され、ひとつのストーリーの中に位置づけられるからこそ、資料となり得るからである。博物館はそれぞれの展示に責任を持って、一体そこで「何を伝えたいのか」という目的を設定し、来館者がそのことを少しでも理解しやすいように、さまざまな工夫を凝らすことが必要とされるようになってきたのである。

こうした中で、ここ数十年、盛んになってきているのが「体験」という手法である。展示を見るだけでなく、実際に来館者自らが行動をおこすことによって、その工程の中で資料への理解を深めてもらおうという方法である。人文系・自然系に限らず、いずれの分野でも最近の博物館では「体験」メニューが無いところは無いくらいである。但し、この場合も、主催者側は「体験」は目的ではなく手段にすぎないと自覚することが必要だと思われる。例えば、「わらぞうりを作る」という体験メニューがあったとする。藁から1足のぞうりを作り終えたならば、体験者は一つの達成感を得て満足するであろう。工作をやり終えたという手仕事の楽しさを味わうかもしれない。しかし、それは派生的に生じたものであって、そのものが目的ではないのである。テーマは何であっても良いが、博物館でわざわざこのような事業をやる場合は、何か伝えたいメッセージがあって、それを伝えるために「体験」してもらおう、というスタンスがなければ、単なる人寄せイベントになってしまう。

たとえば、私が以前勤務していた「体験博物館 千葉県立房総のむら」の場合、その目的は「伝統的なくらしや道具、もの作りの技を保存・継承し、新たな価値を見出し、展示や体験をとおして歴史や文化を学ぶこと」とされる。「ふるさとの技体験エリア」と呼ばれる部分については、いわゆる民家園型の博物館であるが実物資料の展示にこだわっておらず、建物や田畑、里山といった景観全体を「展示」としている。「房総」という特定地域の「江戸時代後期から明治初期」という時代を設定し、土農工商をエリアに分けて、そのモデルタイプとなるような擬似空間を再現する。建物は移築ではなく、新しく再現したものであり、そこに置かれた品々もほとんどは各地方の民俗資料をもとに地元の職人などに作ってもらった、いわば複製品である。だが、それ故に来館者はそ



農家の「稲刈り」



「川魚の店」の「うなぎの蒲焼」

れを「道具」として自由に使うことができるのである。実物資料がほとんど無いのに博物館といえるのか、単なるテーマパークではないのか、という議論もあるかもしれないが、冒頭に記したように、博物館の概念そのものが変化してきた中で、来館者に伝えるべきメッセージを持ち続け、そのための裏づけとなる現地データの蓄積がなされていることによって、テーマパークとは明確に区別される。「房総のむら」ではそのコンセプトの中で、年間300を超える体験や実演のメニューが毎日10数種類ずつ実施されており、実際に行なわれていた生活をいろいろな角度から擬似体験することができるようになっている。農家エリアでの農産物の生産や加工技術、食品加工、手工芸、年中行事の体験、町並みエリアでの職人技術の体験、武家屋敷における習い事などの体験、また時に応

じて農村歌舞伎舞台で民俗芸能の上演なども行なわれる。農家と職人の技術では、材料や道具を相互に提供するような有機的な関係ができており、また日々のこうした生産活動の実演・体験によって展示物である「景観」も維持されている。博物館で民俗文化を紹介しようとする目的は、人々が生きた文化や社会を理解してもらうことにあるが、そのためには、「房総のむら」の環境と手法は最適ともいえるだろう。資料を並べるタイプの博物館においては文字や映像で2次的に説明するしかないことを、実際に似た環境で「やってみる」ことができるのだから。

こうした「体験」の有効性はすでに市民権を得て、全

国の博物館が独自に工夫を凝らして実施がなされているところである。しかし、前述したように、「体験」という手段が楽しく魅力的であるが故に、それ自体目的化してしまう危険性もまた大きい。本来は、メッセージを伝えるための手段であったはずが、別の目的（例えば家族のふれあいの場を提供するというような）のほうが優先されて全く無関係のお手軽な体験が増えてしまったりすれば本末転倒となり、その施設は自ら存在意義を見失ってしまう。「博物館」は、今後、当初のメッセージを見失わないよう、上手く「展示」と「体験」という手法を使いこなしていくことが要求されるであろう。

It is not enough to only watch exhibitions at museums.

We need to physically touch, use and take part in them.

The memories of new experiences are left in the participants' hearts.

観覧料という心的バリア

浜田 弘明（桜美林大学資格・教職教育センター 助教授 / COE教員）

How Is the Fee Decided?

HAMADA Hiroaki

今から10数年前、私が相模原市立博物館建設準備担当の学芸員をしていたころ、バリアフリーとかユニバーサルデザインという用語は、まだ社会的にそれほど定着したものではありません。しかし、この10年ほどの間に、博物館界のみならず、社会的認知も急速に高まり、ハードの面では充実しつつあると言えます。

しかし、日本の地域博物館の現状を見ると、未だに有料入館ということが利用者にとって大きなバリアとなっているように思われる。バリアフリーという用語の用い方としては適切ではないかもしれないが、地域博物館の根幹を考える時、展示観覧が無料か有料かという問題は重要なものと考えます。

博物館法第19条に「公立博物館は、入館料その他博物館資料の利用に対する対価を徴収してはならない」という条文があるにもかかわらず、多くの公立博物館建設の際には、受益者負担という名のもとに、行政当局や議会の中でも、有料入館は当然のことのように論議が取り交わされている。実は、博物館法には抜け道が隠されていて、第19条は「但し、博物館の維持運営のためやむを得ない事情がある場合は、必要な対価を徴収することができる」と続いている。

私たちはかつて、このような議論に対応すべく、各地博物館の入館料徴収根拠の調査に当たって見たことがある。公立博物館の入館料は100～300円が相場であったが、その金額設定に積極的根拠は見出せず、利用者にあまり負担と思われない程度の金額とし、隣接館を参考にしたというものが多かった。有料の理由についても、これが「博物館の維持運営のためやむを得ない事情」と言えるのか甚だ疑問ではあるが、有料の方が展示を良く見てもらえ、施設を大事にもらえる、あるいは展示している側も緊張感が持てる、という極めて曖昧な回答が多く、何館かでは、今で言うホームレス対策のためというももあった。

今日、地域博物館の多くは、入館者の減少に悩まされている。2003年度の外部監査で、「民間なら倒産状況」と評された川崎市市民ミュージアムの例は、その象徴と言えよう。入館者減は有料館により多く、しかも長期にわたって展示更新をしていないというのが共通の課題となっている。川崎市のその後の「改善委員会」報告の中で、集客力向上のために入館を無料化にすべきとの意見が出されたのは、当然のことと言え、評価に値するものであった。



相模原市立博物館



博物館外観



常設展示室（台地の生いたち）



企画展「都市化の中の暮らし」

常民参考室の紹介



来年度、実験展示が行われる
神奈川大学の常民参考室。畳百枚ほどの小さなスペースだが、これまで毎秋
展示を行ってきた。 、 は2003年度の布の文化の展示。 、 は2004年
度の鍛造文化の展示から。いずれも日本常民文化研究所の企画展示。



これは計算してみれば明らかなことであるが、もぎりや経理担当者の人件費、券売機の設備費やメンテナンス費を考えると、100円や300円の入館料を徴収して、数100万円の収入を得るよりも、入館無料とした方が赤字額は軽減されるのである。もしも、受益者負担を原則として、観覧料を採算ベースに合わせようとしたならば、年間10万人以上の入館者がある相模原市立博物館でさえ、年間運営経費を3億円としても3,000円という驚異的な金額が算出されるのである。法的不備が前提にあるとは言え、博物館は図書館・公民館と同じ社会教育機関なのであり、何よりも市民の学習権を保障する上で、利用は無料であるべきというのが正論であろう。

幸い相模原市立博物館は、常設展・企画展の観覧は無料で運営されているが、特別展のみは、開館当初から有料とし、観覧料は300円と設定されている。昨年、開館10周年を迎えたが、入館無料のお陰もあり、開館以来、入館者数の減少傾向は見られず、毎年10万人を超える入館者を確保している。しかし、特別展の観覧料300円というハードルは、市民にとってかなり高く、有料展の観覧は入館者の1~2割に過ぎないのが実情である。

もしも、常設展示も有料であったならば、相模原市立博物館の年間入館者は半減どころか、大きく減っていたに違いない。行政当局は、わずか300円と考えるかもしれないが、有料であるということは、利用者の市民には意外と大きな壁となっている。観光地型の博物館は別とし

て、日常的に市民が利用する地域博物館が有料であるということは、利用者にとって、心的バリアとなっていることは事実である。有料だから熱心に、丁寧に見てくれるだろうなどといった非科学的根拠は排除し、行政の中で博物館が厳しい状況に置かれている今日であるからこそ、博物館の社会的使命を考え、改めて公立の地域博物館は入館無料であるべきという原点に立ち戻るべきなのではないだろうか。



エントランス



特別展示室入口



常民参考室に隣接して収蔵展示の部屋がある(、)



第2回国際シンポジウムにむけて

An Invitation to the Second International Symposium on Nonwritten Cultural Materials

画像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く

Interpreting Human Culture through Nonwritten Materials :
Perspectives on Illustrated Material, Folk Implements and Landscape



大里 浩秋 OSATO Hiroaki・的場 昭弘 MATOBA Akihiro
金 貞我 KIM Jeong Ah・河野 通明 KONO Michiaki
八久保 厚志 HACHIKUBO Koshi・北原 糸子 KITAHARA Itoko

まず、各セッションの見通し、希望、PRなどをお話し
いただきたいのですが、国際シンポジウム実施委員会
委員長の大里先生から前置きをお願いいたします。



大里 実施委員会が2月に発足して以
来準備を進めてきたのですが、ここに
集まっておられるコーディネーターを
中心にして4つのセッションの報告者と
コメンテーターを選んでいただいて、
だいたい形が出来た段階なんです。去
年の第1回が外部の研究者の問題提起を受けて学び考
える場であったので、今度の第2回のシンポジウムでやる
べきことというのは、各班、各テーマで3年余取り組ん
できた私たち大学のメンバーでこれまでの成果を報告し
てゲストや参加者の批判を仰ぎ、全体で意見を交わし
て、私たちが目指してきた非文字資料研究を人類文化
研究の中に位置づける可能性をより確かなものにでき
ればと考えています。



的場 私はセッション1「非文字資料を
めぐる方法論的諸問題」を担当してい
ます。私は昨年のシンポジウムで方法
論的位置づけと、それを具体的にデジ
タル資料としてどう入れるかという問
題を課題としたセッションを担当し
ました。今年から第6班として理論総括研究班が立ち
上がりました。これは画像、景観、身体技法をそれぞ
れどう理論的にまとめていくか、およびそれを前提に
して、どう

体系化していくかという方法論的問題を扱っています。
これはとても大変な作業です。今回予定しております
フランス、リヨン大学のアラン＝マルク・リュ先生は、哲
学およびデジタル化にもたいへん詳しい方です。すで
にリヨン大学はカリフォルニア大学パークレー校と組
んで画像資料の実験展示も行っているようで、そのよう
なことも含めて実践的な側面とそれをさらにどのように
発表するかという側面を話していただく予定です。具
体的なタイトルは、「デジタル人類学・マルチメディア環
境のためのデジタル資料」です。私は、自分の専門分
野に近いのですが方法論的なヒストリオグラフィー、
歴史方法論の問題だとか、あるいは純粋に哲学的な諸
問題を検討しながら報告しようと思っております。コ
メンテーターには、本プログラムのサブリーダーの橘
川俊忠先生に引き受けていただくことになっています。



金 セッション2のテーマは画像資料
です。画像を生活文化研究のために資料
化することは、今までCOE1班が取り
組んできた課題でした。資料化の具
体的な目標は「絵引」の編纂で、日
本常民文化研究所の研究成果である『
絵巻物による日本常民生活絵引』を継承しながら、
新たに日本近世編の生活絵引を作成する一方で、
対象地域を東アジアにも広げ、中国編、韓国・
朝鮮編の絵引を作ることを目指して
います。セッションの具体的なタイト
ルを「画像のなかの暮らしと文化 日本と東
アジアの近世」としたのは、日本近世編・東
アジア編絵引編纂の過程とその

Our symposium consists of four sections.
Each section has its own theme.
And at the end of the symposium, we will bring together the information
and discuss the relationship between the four themes.

成果は勿論、図像資料を読み解き、資料として活用するまでの一連の研究手法を今回のシンポジウムで紹介したいと考えたからです。

セッションの前半では、まずCOEの研究メンバーから報告を行います。福田アジオ先生が資料集としての絵引編纂における理論的な方法や意味について報告し、次に日本近世編を担当している田島佳也先生から加賀地方の農書である『農業図絵』を取り上げ、そこから読み取れる近世の暮らしについて報告して頂きます。そして東アジア編としては、台湾、中央研究院の王正華助研究員が中国の風俗画にみる都市文化について、そして私が韓国・朝鮮編の絵引編纂についてご報告いたします。特に絵引編纂資料の中心をなす朝鮮時代制作の風俗画に対する検証の過程と絵引編纂の実例を取り上げながら、図像から読み取ったメッセージを分析することが主な内容になります。セッション2の後半は、ブリティッシュコロンビア大学のジョシュア・モストー先生とハイデルベルグ大学のメラニー・トレーデ先生の御二方をコメンテーターとしてお招きし、コメントをいただくことになっています。日本中世の文学・文化史をご専門とするモストー先生と明・清時代の中国絵画資料に精通しているトレーデ先生は、現在、欧米の図像資料研究分野の第一線で活躍されており、神奈川大学COEの絵引の編纂について、適切で刺激的なコメントをいただけることと期待しています。



河野 セッション3は「犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」というタイトルを掲げました。このテーマの立て方からお話したいと思います。我々は「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という大きな看板を掲げているわけですが、いまなぜ非文字資料なのかと問い直すと、20世紀の後半に地球科学と生命科学が大進化をとげて、地球の進化と生命の進化がお互いに影響しながら展開してきたということが大変はつきりしてきました。この地球と生命の共進化という体系の末端に、人類史をどう^な織り込むかということが21世紀の我々の抱えている課題

であろう、そのためには射程距離の長い非文字資料を使って人類文化を解明しようという意気込みの表明が「人類文化研究のための非文字資料の体系化」なのだと思っています。

ところで文化というのは人類がある環境の中で生活していくために生み出すもので、人は裸のままでは環境の中で生活できませんので、人類と環境とのクッション材として衣服や住居や弓矢や鍬などの文化を生み出していくものですね。その点で言えば自然が規定的な意味を持



韓国



中国

韓国犁は三角枠で無床犁、中国犁は四角枠で長床犁
(韓国 全羅南道農業博物館)



第2回国際シンポジウムにむけて

っていて、ほとんど自然決定論でいいと思うんです。ところが現在我々が見ている文化は、その土地で生み出されたとは限らない。なぜなら人類は民族移動を繰り返していますので、よその土地で形成された文化が民族移動にともなって違った環境に持ちこまれたという現実があるわけです。20世紀の大きな成果であった照葉樹林文化論は、その点のチェックを欠いている。いま照葉樹林帯で生活している人々の文化は、その環境で生み出されたとは限らないわけです。この弱点を克服しながら21世紀に新たな展開をしていくためには、アジア規模で展開されてきた民族移動の解明が重要な意味を持つてくるわけです。

ところで文字資料は人間社会内部の記録が中心ですし、時代をさかのぼれば資料が希薄になってくる。そこで民具の犁に注目したんです。犁は牛馬に引かせて土地を耕す畜力耕耘機ですが、これは形が容易に変化しないことがわかってきました。日本の犁は朝鮮半島や中国から伝わってきたものですが、いま各地の博物館・資料館の収蔵庫で大正・昭和期の在来犁を見ましても、朝鮮系か中国系かそれらの混血型かが容易に見分けがつくのです。つまり20世紀の民具から6~7世紀の歴史情報が引き出せるのです。犁は中国では戦国時代に登場しますので、東アジア全域で犁の形態比較をやれば、過去2500年間のアジア規模の民族移動が復原できるであろう、というのがセッション3のねらいです。

そこで報告者は、中国はたびたびの現地調査で民具と考古資料の両面から犁耕史を追っておられる東海大学の渡部武先生、韓国は民俗調査・農具研究の大家で仁荷大

学校名誉教授の金光彦先生、日本は26年来各地の資料館を回って朝鮮系・中国系・混血型の読み分けを進めている河野が担当、コメンテーターは中国、雲南大学の尹紹亭先生です。



八久保 私どものセッション4は「景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性」というタイトルで行うことにしました。的場先生にお話していただいたように今回われわれが本プログラムにどのように寄与できるか

と考えた場合、より具体的な資料と経験といったものを提示しようということで、空間編成とつけてありますが、空間編成という言葉は人文地理学で使われている言葉で、主に景観などの変化に対する各主体の問題、ヒトであるとか社会組織であるとか資本・企業であるとか政治的意思だとか集団の意思であるとか、そのようなものが如何にして景観に影響を及ぼすかということです。このようなテーマにしたのは、われわれ3班が基本的には日本常民文化研究所所蔵の渋沢フィルムの跡づけといいますが、履歴を洗うといった作業を行おうとしていて、景観認識についてどのように捉えるか、人間が環境にどのような刻印を押してきたかということを考えるセッションですので、われわれ報告者やコメンテーターの専門である地理学の考えを提示してみたいと思います、またそれに対してご意見やご批判をいただければと思っているからです。具体的な報告テーマとスタッフについてご紹介させていただきますと、佐賀大学の藤永豪さんはこの神奈川大学COEで育った研究者ですが、「景観分析における資料と





しての写真の可能性」ということで共にこのテーマを追っかけてきました。それから桜美林大学の浜田弘明先生と一緒に韓国で2年かけて現地調査をおこない、その具体的な事例について紹介していただきます。次にコメンテーターですが、平成国際大学の鄭美愛先生と神戸流通大学の奥野志偉先生のお二人にお願いしました。ご両人は、韓国や中国の都市や農村地域の構造や景観変化に造詣の深い研究者です。

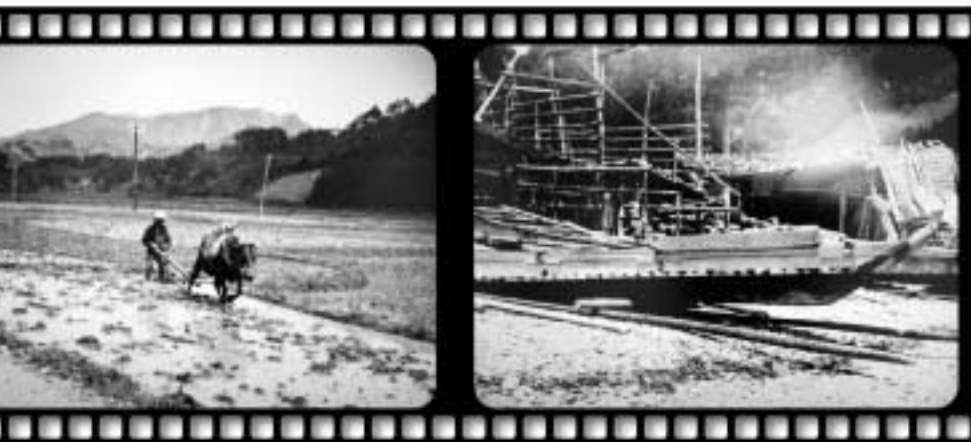
外部評価では体系化の視点がないとの指摘もありました。今回のシンポジウムの場合はそこをある程度視野に置いて全体をコーディネートされるのか、それともそれ以前の各部門の充実を期すというところを当面の目標とするものなのか…。大里先生如何でしょうか？

大里 今おっしゃったことは両方やらなければならないんですが、ただ一回目と違って今年というのはあと来年しかない訳で、今年と来年で何ができるか、何を目標かを定める必要があります。3年余やってきたことが必ずしも全体化していない、自分のところの研究に終始して

いる、という現状でいえば、各セッションでは、今取り組んでいてここまでは考えたという内容をまず説明することが大切です。そして、それにプラスして、各セッションで報告された中身からどういうことをお互いが共有化すべき課題として取り出せるかを、二日目の最後の総合討論の場で語り合いたいと思います。その意味で総合討論はとても重要だと考えており、その司会を北原先生にお願いしました。



北原 今のそれぞれのお話を伺っておりますと、これまで遂行してこられた問題、あるいはそれぞれの目標としたテーマについてお伺いできたわけですが、今年のシンポの課題は神奈川大学COEの掲げるテーマの全体像構築へ向けて相互の連関がみえる形にすることだと思われま。その点でいえば、少なくとも「体系化」という到達点を示すことは最後の年の課題としても、本年度はそれへ向けての共通項をそれぞれの追究するテーマのなかに太い柱として自覚的に打ち立てていただくことではないかと思。司会者としては、それぞれのセッションのコ



上下とも 日本常民文化研究所所蔵の「澁澤フィルム」より



第2回国際シンポジウムにむけて

ーディネーターの方々とはその助走のための討論を積み重ねて、シンポジウムにご参加いただく海外のコメントーターの方々の広い視野からのご意見を有効に生かす道筋を付けたいと考えています。

的場 私たち理論班は毎月いろんな班の報告を聞いています。画像のほうでは鈴木陽一先生、田島佳也先生にお話をお聞きしました。身体技法では廣田律子先生、河野通明先生。環境のほうはまだお聞きしていません。一つの班においても、たとえば画像の班でも必ずしも統一がとれてないと思います。たとえば田島先生の画像の読み方は文字資料から読むという方法ですね。一方、鈴木先生は画像のほうから文学的に読む。COEの研究としては、画像のほうから読むのが筋なんだろうが、研究者はそれまでのご自分の研究スタイルの中でどうしたらいいか苦労しているところだと思います。とはいえ一つの班の中で方法を統一して欲しい。たとえば、金貞我先生は美術史の専門家、田島先生は文字資料、歴史学の専門家、鈴木先生は文学の専門家、蝦夷地なら蝦夷地、本州なら本州の資料をみんな交替でみて、統一的な話をつけてもらえばいいかなと思っているんです。今は国別、地域別に分かれて、それぞれのやり方でやっていると思うんです。そのあたりで少々つめてもらえればいいのかなど、伺っている範囲で考えています。身体技法の場合でも、河野先生にお聞きする限り身体のほうが見えてこないという感じがあるんです。身体と民具、この二つをそれぞれ

れ統合して一つの班の中での摺りあわせをすべきだと感じています。私ども理論班としては、身体技法、画像、景観の三つをどう統一化するかよりも、それぞれ内部での摺り合わせをして欲しいと思っております。大変僭越な言い方かもしれませんが。しかし全体を見渡せるというのは私たち理論班だけですから、無礼を承知で何らかのコメントや調整をつけようとして動いています。これをシンポジウムの中に反映していかなければならないと思っております。

金 画像資料を読むための理論的分析枠が必要であるという点については、私も共感いたします。COE1班では東アジア絵引編纂資料の一つとして18世紀の中国・蘇州を描いた「姑蘇繁華図」を取り上げ、その分析に取り組んでまいりました。「姑蘇繁華図」の景観描写に即して蘇州の現地調査を行いました。その描写が画家の目を通して描きとめられた景観であるにもかかわらず、非常に写実的的確であることに驚きました。このような意味では、景観の変化を考える上で絵画資料を含む画像資料も写真資料に劣らない、有効な資料であると思います。

的場 要するにそれぞれの専門家がいらっしやいますよね、文字資料、美術史、文学、この御三方の知恵をすべての分野に生かせばいいじゃないかということです。最初から日本の画像資料は写実的である、写実的なので美術史の方の参加は不要だというのはなく、同じ資料を廻しながら、議論をやりながら全体を見渡せればいいのかではないでしょうか。分業化されていますよね。

八久保 さっきの河野先生のお話で文明史的に農具を捉えそれを日本や東アジアで検証するというやり方は、我々がやっている手法、地理学的分布からやって全体系、地球全体を考えるというやり方に近いものですから、伺っていてとても分かりやすかったということがあります。そういう点で考えてみますと、景観にしる、画像資料の読解にしる、的場先生がおっしゃったように各々の空間スケールを限定していく、もしくは拡大をしていってその中から理論、体系を考える。そうすると東アジアであるとか、中国、韓国、つまりネーション ステート(nation state)であるのか、中国文化圏なのか、どのスケールで考えるかがテーマについて最良なのかということも明らかになってくるだろうし、あるいは日本が植民地支配をしていた時代の拡大した日本領域にどのような問題と痕跡を残したかということが明らかになってくると思いま



す。ですから本プロジェクトをオーソライズする一つの考察手段としてこの空間スケールの問題を少し議論させていただければありがたいと思っております。それと先ほどお話にあった時間軸と空間軸というものを整理しておかないとせっかくのこのような実績、業績が次の世代につながっていかないのではないかと考えております。あくまで地理学から見たものなのですが、空間スケールを議論に入れてもらいたいというのが私の提案です。

金 画像資料を活用した歴史研究は、特に文化史の領域では、最近、世界的にみても非常に活発になってきた観があります。例えば、パークレイ大学では19世紀から20世紀初頭の写真資料を利用した“Shanghai in Images : A Historical Photographic Database(1840-1949)”という歴史研究に取り組んでおり、非文字資料研究として世界的に評価されています。また、マサチューセッツ工科大学は、明治時期の日米関係の始まりを取り上げた“Commodore Perry and the Opening of Japan (1853-1854) Black Ships & Samurai”というデータベースを公開しましたが、これにも多くの画像資料が取り上げられています。また、台湾でも、中央研究院若手研究者を中心に中国の絵画資料から生活文化を語る研究が盛んに行われています。このような動きを考えますと、中世の生活文化研究を画像資料から求めた『絵巻物による日本常民生活絵引』は、非常に先駆的な試みであったと改めて認識させられます。そして、日本近世の画像資料の中心は一連の「洛中洛外図」でした。近世の京都とその周辺を描いた「洛中洛外図」は、京都の文化や風俗だけではなく、都市空間や景観の研究にも有効な手がかりを提供してきたと思います。

八久保 現在の画像資料がマテリアルとして写真であるとか映像資料であるとすれば、この写真等が明治時代の写真と同じような手法で利用出来るとお考えですか？

金 画像資料は画家の創意というフィルターを通して人為的に描いたもの、写真は写し手を通して機械が記録したものですから、資料として取り上げる際には当然、作爲が働く過程を検証することが要求されると思います。

八久保 しかし写真が真実を写しているかどうかというのは疑問ですね。

北原 写真に関してでは歴史的に見ると記録としての意味よりも、主流の流れとしては芸術としての流れが強いんですね。写真家のほうが何を切り取るかという問題と



して、現実を切り取るかということで芸術性を付与させてみていく傾向があります。だから災害写真なんていうのはまったく価値を置かれていないわけです。

的場 またつくる側と読む側、読む側がどのようにそれを読んでいくかという問題があります。

北原 その問題もありますね。

的場 ヨーロッパでも中世の神話や宗教というものを一般庶民がどう理解していったかという研究が多いのですが、写真や画像は相手にどう読まれるか、作る側と読む側で読む側の研究が展開されればかなり新しい側面が見えてくるということになります。

八久保 全体として広告や情報伝達やプロパガンダのマテリアルとして画像が写真に変わったとして捉えるのか、または写真はそれらとは全く別物として登場したのかには注意が必要だと思います。

金 画像資料における写実表現は、物事があるがままにスケッチしたものを意味しているのではありません。特に、東洋美術における写実表現や風俗表現はフィクションの世界をイメージ化しているものが大部分です。画家が写実的な風景や人間の営みを克明に描いていても、それは、フィクションの世界をリアルに演出するために意図的に用いたものである場合が多いのです。その表現は、迫真性を持たば持つほどフィクションの世界をリアルな



第2回国際シンポジウムにむけて

『絵巻物による日本常民生活絵引』の図より（日本常民文化研究所所蔵）

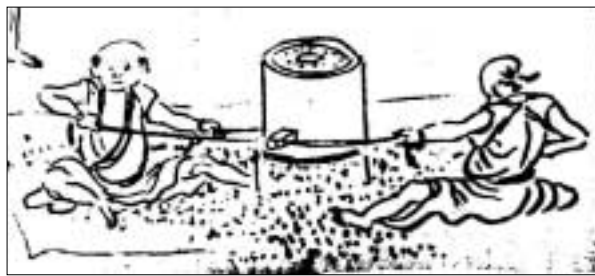


世界に押し上げて展開させていきます。同時代の人々が図像の伝えるイメージを共有できる、という前提が成り立つのであれば、絵画などの図像資料には実写に劣らない写実性と記録性があると思うのです。

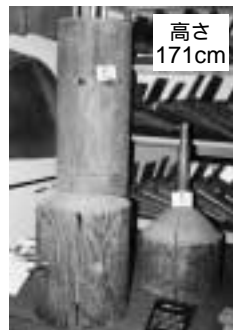
北原 写真が必ずしも記録性に富んでいるということはありません。その前提で、そこは動かないものとして論じてしまうとなかなか問題が大きいと思います。そこにあったことは事実だけど、それは切り取る側のまなざしで切り取っているのです、記録は記録なんだけれども、絵画の記録と同じ記録とはいえない要素もあるので、その辺も含めて分析すれば渋沢写真の問題も関係してくると思います。

河野 では一言だけ。的場先生から私の報告に身体のことが見えにくいというお話があって、その通りなんですけど、身体技法というのはある環境のなかで暮らし続ける中で、環境への適応として身につくものと考えられます。ところが人類史には民族移動がたびたびあって、別の環境に移った場合に、もう身体は固まってしまって身体技法はいまさら変えられない、だから変わらないということがあり得ます。たとえば日本人の座位姿勢についても、おそらく日本列島に渡ってくる前に身に付いてしまった可能性も考えられる。そうであればある地域の人々

図像・民具に刻印された身体技法



座位の初摺白（関西：堀家本「四季耕作図巻」）



立位の初摺白（青森県：（左）板柳町郷土資料（右）小川原湖民俗博物館）

の身体技法を、いま住んでいる環境との関係で説明する
 なら、それは資料批判なしに文献史料を扱うのと同等の
 危険がある。だから日本文化の解明のためにまず東アジ
 アの民族移動を復原して、日本列島の民族分布を確定す
 るところから始めようとしているわけです。その一方で、
 年報1号で報告しましたように、木摺臼^{きずるす}の作業姿勢を通し
 て民族分布を復原する具体的な作業をすすめています。
 八久保 例えば農業などの耕作限界を求めて民族が移動
 することになる、同じ環境を求めていくなれば身体技
 法も移動先では変わらないということになりますか。

河野 おそらく民族移動するときは選べない、生きるた
 めにどこでも生きられるところに行く。違った環境であ
 っても行き先がそこしかなければそこに行くわけです。

的場 河野先生が言われている民族移動の「民族」は近
 代の概念ですよね。もっと過去に遡ると、それはもっと
 素朴に言えば「部族」、部族移動のことですね。そこには
 「漢民族」とか「日本民族」という概念でなくて、部族が
 移動するということですね。私たちが現在使っている「民
 族」を読み取っているわけではないんですね。

河野 そうです。

金 非文字資料を文字資料の対立概念として捉える必要
 はないと思います。先ほどの場先生がおっしゃったよう
 に、非文字資料研究から文字資料を排除しようとしたと
 きに無理が生じるのではないのでしょうか。絵引編纂にお
 いても、図像資料を文字資料と結び付けて分析する方も
 いれば、図像資料を図像として読み取るようにする方も
 いますが、文字資料を排除するのではなく、非文字資料の
 もつ特徴を如何に既存の研究に取り入れていくのかを考
 察すべきだと思います。人類の文化遺産の中には、非文
 字資料のみに、時代の証言が残されているものもありま
 すが、それと同時に、文字情報をより効果的に盛り上げ
 ための非文字資料もあります。例えば、『絵巻物による
 日本常民生活絵引』のすべての資料は、ご存知のように、
 中世の絵巻物ですが、ここでの非文字資料の役割は文字
 情報を盛り上げるために、もしくは、はるかに効果的な
 方法で表すための、もう一つの手段でもあります。あ
 まり非文字資料を強調してしまうと、資料としての非文
 字と文字の協演に不協和音が生じてしまうのではないで

しょうか。

的場 文字資料の人が図像学を勉強すればいいのではな
 いでしょうか。要するに対象が非文字であればそれにし
 たがって研究手法も変わる。その対象にしたがって自分
 も変化していく。共同研究というのは自分の研究手法も
 変化することですよね。自分の研究スタイルが絶対変化
 しないとはいえない。相性がどうこうでなくて自分の研
 究が変化する。逆に相手のほう、図像学の研究者も文字
 資料を検討する場をつくるべきです。だから3人でやりな
 さい、4人でやりなさいと一つの対象項をばらばらに区分
 すると、討論もしないで別々の方法で研究が進んでしま
 います。これを変えていくというのが共同研究の意味で
 すよね...

北原 このプログラムは非文字資料が売りなんですよ。
 でもそれは文字を排除してではなくて、歴史研究の中
 では文字研究が基本的な領域を占めていますが、そうでは
 なくて非文字という範囲から問題を見たらどう見えるの
 かというふうに理解しております。だから必ずしも非文
 字を排除しているわけではないんだけれども、無視され
 ている、あまり意識的に扱ってこなかった領域を基本に
 据えると何がわかるのかという設定だろうと理解してい
 ますので、この非文字という新しさ、キャッチフレーズ
 として考えるといいのではないですか。

大里 前回のシンポジウムは定義づけをするような題で
 「非文字資料とは何か」というテーマだったんですが、今
 回は私たちの課題を明確にするために「非文字資料から
 人類文化を読み解く」という決意をこめたテーマにしま
 した。ですから、各セッションで報告する皆さんには、
 自分たちの調査研究から、このようなことが読み解けた
 ということを知りやすい形で明らかにしていただきたい
 いし、さらには、それぞれの報告のエッセンスを取り出
 し共有化できる視点を確認することで、「非文字資料の体
 系化」といういささか持余し気味の課題に近づく一歩
 にして、来年に予定している第3回のシンポジウムに引き
 継ぐことにしたいと思います。今回のシンポジウムで活
 発な議論が展開されるよう、そして多くの人に参加して
 いただけるよう、実施委員会としてこれからの準備に取
 り組んでいきますので、よろしく。



第2回 COE国際シンポジウム

「画像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」

開催日程 2006年10月28日(土)・29日(日)

開催場所 神奈川大学横浜キャンパス16号館 セレストホール

第1日目 10月28日(土)

プログラムスケジュール

第2日目 10月29日(日)

9:30~10:00 (受付) セレストホール
10:00~10:05 開会挨拶 山火 正則(神奈川大学長)
10:05~10:20 主催者挨拶 福田 アジオ
(神奈川大学教授・COE拠点リーダー)

セッション 10:20~12:00

「非文字資料をめぐる方法論的諸問題」

<コーディネーター> 的場 昭弘(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
<パネリスト>
・アラン=マルク・リュ(フランス、リヨン第3大学教授)
「デジタル人類学・マルチメディア環境のためのデジタル資料」
・的場 昭弘
「非文字資料はいかに認識されるか 知覚をめぐる哲学的諸問題」
<コメンテーター・司会>
・橋川 俊忠(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)

セッション 前半 13:30~15:30

「画像のなかの暮らしと文化 日本と東アジアの近世」

<コーディネーター> 金 貞我(神奈川大学COE教員)
<パネリスト>
・福田 アジオ
「生活絵引編纂の世界的意義」
・田島 住也(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
「近代生活絵引の作成に向けての試み 『農業図絵』を題材にして」
・王 正 華(台湾、中央研究院近代史研究所助研究員)
「17・18世紀中国における都市図、都市文化と風俗画の興隆」
・金 貞我
「韓国・朝鮮編絵引編纂と画像資料 『平壤監司饗宴図』を例にして」
<司会>
・西 和夫(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)

セッション 後半 16:00~16:55

「画像のなかの暮らしと文化 日本と東アジアの近世」

<コーディネーター> 金 貞我
<コメンテーター>
・ジョシュア・モスター(カナダ、プリティッシュコロンビア大学教授)
・メラニー・トレーデ(ドイツ、ハイデルベルグ大学教授)
<司会>
・西 和夫
16:55~17:00 閉会挨拶

9:30~10:00 (受付) セレストホール

セッション 10:00~12:00

「犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る」

<コーディネーター・司会>
・河野 通明(神奈川大学教授・COE事業推進担当者)
<パネリスト>
・渡部 武(東海大学教授)
「中国の伝統犁とその技術移転」
・金 光彦(韓国、仁荷大学校名誉教授)
「韓国犁の形態と地域的特徴」
・河野 通明
「日本犁に見られる朝鮮系・中国系とその混血型」
<コメンテーター>
・尹 紹 亨(中国、雲南大学教授)

セッション 13:30~15:30

「景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性」

<コーディネーター・司会>
・八久保 厚志(神奈川大学助教授・COE共同研究員)
<パネリスト>
・藤永 豪(佐賀大学講師・元神奈川大学COE研究員(PD))
「景観分析における資料としての写真の可能性」
・浜田 弘明(桜美林大学助教授・神奈川大学COE教員)
「景観研究資料としての『渋沢フィルム』の今日的意味 韓国南部を例に」
<コメンテーター>
・鄭 美愛(平成国際大学非常勤講師)
・奥野 志偉(神戸流通科学大学教授)

総合討論 15:45~17:25

<司会>
・北原 糸子(神奈川大学非常勤講師・COE事業推進担当者)
<パネリスト>
・的場 昭弘
・金 貞我
・河野 通明
・八久保 厚志

17:25~17:30 閉会挨拶

(プログラムの内容については変更になる場合もございます)

申込
方法

参加ご希望の方は以下の必要事項を記載の上、ハガキ・FAX・Eメールにて事前にお申込み下さい。
氏名 住所 電話番号 所属機関 参加希望日
記載された個人情報には注意をもって管理し、シンポジウムの円滑な運営のために活用させていただきます。

申込先

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
神奈川大学COE事務局 FAX:045-491-0659 E-mail:himoji-coe@kanagawa-u.ac.jp
*問合せ TEL:045-481-5661(内線3532)

アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカの情報発信(展示)の発達比較

日本から一番遠い国、ブラジルでは

大西 万知子(2003、2004年度COE研究員・RA) ONISHI Machiko

はじめに

2005(平成17)年12月2日から12月18日まで、ブラジル、サンパウロ大学日本文化研究所にて、研究の機会をいただきました。今回の研究目的は、私の生まれ育ったアジア、留学先であったヨーロッパ、そして、まだ行ったこともないラテンアメリカの博物館における情報発信(展示)のあり方について、体系的に比較し、相關的に考察することでした。そして、今回の海外派遣研究は、この神奈川大学COEプログラムを成功させたいという思い、研究を通じて日本と世界の架け橋になりたいという願いと、自分自身への新しい視点とより広い視野を作るための挑戦でもありました。

ブラジルのいくつかの博物館を訪ねて

2週間の滞在期間、サンパウロ市内の博物館(日本人移民資料館、移民博物館、サンパウロ美術館)や、サンパウロ大学の博物館(考古学民族学博物館、現代美術館、パウリスタ博物館)を訪ねることができました。また、広島県人会や、在ブラジル原爆被爆者協会へも訪ね、私の、より絞った研究テーマである広島の原子爆弾投下についての展示のあり方についても調べることができました。2週間の訪問で、ブラジルの博物館を数館訪れただけで、ブラジルの博物館の傾向や特徴をつかむことは不可能ですが、ブラジルでは、博物館という場所が、そこに暮らす人々にとって、あまり魅力的な場所ではないかもしれないと私は感じました。ブラジルには、サンバやサッカーの楽しみや、食文化や音楽文化が豊かに存在しており、物を置いてみせるという場所は、生き生きとした生命のある場所として存在するのが難しいのかもしれないかもしれません。そのほかの理由として考えられるのは、この地は、世界各地から珍しいものを集めるという場所としてよりも、逆に、この土地の持つ金や銅といった豊かな資源や、羽飾りなどの美しい品々を、心を魅了するものとして、集められていった場所だからです。さらに、考えられる点は、先住民であるインディオがあまり、物欲がなかったことや、砂糖黍農場、金やダイヤモンドの採掘、コーヒープランテーションのために、奴隷としてアフリカから

連れてこられた人々は、おそらく、彼らの身近な生活用品をたくさん持って来られなかったのだと思います。そして、祖国が戦禍という状況で、ブラジルへ移民として来た人々は、過去よりも未来に希望を持って生きてきた人、現在を一所懸命生きてきた人々です。彼らにとって、過去の記憶が付随する物は、あまり大きな価値を持っていなかったのかもしれないと感じられます。このような歴史的背景と、豊かな資源と自然、多様な民族で織りなされたブラジルの地に存在する博物館は、本来、ブラジルにしか発信できない大きな力を秘めているはずでは

おわりに

博物館という場所は、一見、普遍的な知の場所、記憶の場所として見えますが、実際、ある文化(ヨーロッパ)が生み出した特殊(パティキュラー)な記憶の回路の一つとして、位置づけられます。その特殊な記憶の回路が、植民地化、グローバル化、ヨーロッパ近代の生み出した普遍的志向の影響をうけて世界中に広まったと考えられます。博物館という場所は、一般に、外見的、静的なイメージが強いですが、実際には、集める、保存する、展示するという、積極的な人の行為がその深部に隠されています。今後、人類が発達させてきた記憶の場所、世界に広がる博物館を、静的、外観的イメージの場から解き放ち、ヨーロッパの文化が長く育ててきた、人類の身体的記憶や集合的感性を映し出す場として、探求していきたいと思



Ferrante Imperato's museum in Naples.
Hooper-Greenhill, Eilean
' Museums and shaping knowledge (1992年) 127頁



2005年度 外部評価と対応策

An Auditors Report of Our Project and Our Response to It

本学COEプログラムでは、2006年2月13日、17日に3回目の2005年度外部評価を実施しました。今回は、立正大学文学部 黒田日出男教授、静岡大学情報学部 八重樫純樹教授、慶應義塾大学文学部 鈴木正崇教授の3名を外部評価委員に委嘱し、当日は、拠点リーダーをはじめ関係者が出席して、3年目の進捗状況を報告しました。その上、所定のチェックシートに基づきながら、具体的な問題点を指摘して頂き、後日各氏からは下記のような評価報告書が届けられました。



委員の評価（要旨）

黒田 日出男 委員

今回の外部評価については、前回指摘していた問題点・疑問点がさまざまな点で改善されており、残余の期間の研究推進とその結果に、ある程度の期待がもてるようになってきている。以下に留意点を挙げる。

PDや若手研究者たちを本COEの研究の最前線で鍛え、かつ独創的研究の担い手とし、研究に参加できるようにする。研究メンバー内部の意志疎通と合意形成が十分になされていない面があるようなので、早急な改善を期待したい。予算も一層明確な研究課題ごとの重点化が図られるべきである。

デジタル・コンテンツなどの制作に民間の業者との共同開発が有効である。

本プログラムの拠点となっている、歴史民俗資料科学研究科と日本常民文化研究所の研究施設及び環境は、実に素晴らしいものがある。充実した施設と貴重かつ膨大な史資料の蓄積は、神奈川大学の誇るべき「戦略的資産」であるとの認識を新たにしたい。

本プログラム終了後も、研究と教育の両面で研究拠点に相応しい大学としてのステータスを形成して欲しいし、それに恥じない研究体制の継続を展望していくべきであろう。そのためには、研究継続のためのコスト、研究成果の公開を継続するためのコストをきちんと算定し、実行可能な計画を今から検討していく必要がある。

八重樫 純樹 委員

展示・演習施設、資料管理・整理施設、情報整理施設等、博物館機能が充実している。大学の支援は極めて評価に値するが、本COEプログラム終了後の維持、利活用、そしてこれらを活かした研究活動のサポートとしての予算処置や諸施設に関する利用計画の策定に着手すべきである。

今までの研究組織体制から、情報発信の組織体制へと移行していくべきである。今後の組織・研究活動の情報発信活動への取り組みについては、異議はなく、非常に合理的であると思われる。

資料集や研究論集の刊行、そしてデータベース構築の取り組みは、ただちに活動を開始すべきである。国内と近隣国の動向について、調査、連携を行う必要があるものと考え、データベース研究の一環として、以下の点を18年度より、着手、推進することを提案する。

国内の関連機関：アジアとの連携を大きなテーマとして、最新の情報システム開発、データベース開発を行っている、九州国立博物館の調査と連携が可能か検討する必要がある。

韓国・中国の情報化関連機関：韓国の国立民俗博物館、国立中央博物館などでは、文化財資料の国家的分類基準に沿って諸資料が記録管理（データベースとして）されており、今後韓国との情報交流も必要となってくるので、それらの実態を把握し、協力関係を構築するための討議に入ることを提案する。

中国についても、(株)リコーソフトウェア研究所と中国科学院との連携共同研究として、北京に理光(中国)投資有限公司を設立し、中国のチベットの民俗資料をもとに情報化開発研究を遂行しているのので、ここについても調査することを薦める。

鈴木 正崇 委員

従来の学問分野には抜け落ちていたユニークな領域に果敢に挑んでいる点を評価する。また、安易に国際シンポジウムを行わず、成果のある程度の蓄積と方向性の確立を待って実施した慎重さも貴重だと考えた。

「非文字研究」は研究課題が拡散する傾向を帯びており、学問研究の成果を社会貢献に繋げる長期的ヴィジョンも考えるべきかもしれない。

標題の「非文字」という用語は、非文字と文字の相互作用や、それによって生み出される想像力に関する考察が欠落する恐れがある。文字と非文字の間の曖昧な領域の研究が大事であろう。

非文字文化に関しては、世界的に進む「文化財化」の動きも考慮すべきかもしれない。近年、無形の文化をユネスコで世界遺産に登録する動きが加速している。開発や災害と環境に関して実態調査を数多く実施して、知識や情報を集積し、一方的な発信ではなく、地元住民の体験知との双方向的な交換を行える場の構築を考えるべきであろう。

中国の場合、『姑蘇繁華図』のような漢族の図像だけでなく、清代の『苗蛮図冊』のような、漢族から非漢族を見る視点、文字を持つ人々が文字を持たない人々を表象してきた状況についても検討すべきかもしれない。また、戦前の海外の神社の調査では、東アジアの近代で日本が果たした役割や位置を明らかにするだけでなく、植民地化状況の議論を含めての大きな比較の視点が必要であろう。

日本常民文化研究所の施設やスペースを活かして、世界の中でもユニークな「非文字研究」あるいは「民衆文化」の研究拠点になることを期待したい。国際交流を通じて、「非文字研究」が開かれた学問となり、将来は社会貢献に結びつく可能性もある。研究会をもっと公開し、研究者だけでなく、「民俗知」を活用する場を作ることや、職人の手仕事を評価できるような交流の場を生成してほしい。最終的には、デジタル・アーカイブのような形での情報の共有を構想し、検索システムのあり方を再検討し、デジタルだけでなく、アナログの発想を残していく方策を考慮すべきである。

学生の教育は、博物館実習などの教育や研修の充実への取り組みも今後の課題である。

国際シンポジウムは、ユニークな試みを小規模でも良いから、各班ごとに実施すべきであろう。

『絵巻物による日本常民生活絵引』には間違いもあるので、翻訳によって世界的な図像資料にする場合には、注釈や解説をつけるなどして補整に留意すべきであろう。

外部評価に対する対応策

問題点1 < 組織の改編について >

21世紀COEプログラム委員会の中間評価などをうけて、必要な組織再編と研究目的の明確化と重点化がなされつつある点は評価できる。ただし、研究メンバー内部の意思疎通と合意形成が十分になされていない面があるようなので、早急な改善を期待したい。(黒田)

プログラム全体への印象は、全体的なまとまりや有機的な結合に欠ける点があるといえよう。「非文字研究」は研究課題は拡散する傾向を帯びており、総合や収斂の方策が求められる。今後は、学問研究の成果を社会貢献に繋げる長期的ヴィジョンも考えるべきかもしれない。(鈴木)

問題点1の対応策 < 組織の改編について >

本プログラムでは、当初、前半の3年間を各班の調査研究による資料の蓄積と解析、後半の2年間を収集した諸資料の総合と体系化、ならびに情報発信という計画のもとに事業を推進してきた。しかし、前半の調査研究段階における各班内・班間での統合に向けた合意形成の不足などにより、全体的な連携が適切になされていない部分があったことは否めない。そのことが、後半の重点課題である体系化、情報発信といった課題の取り組みにも大きな影響をあたえている。

そこで、後半の目標達成をより確実にするために大幅な組織改編を行った。その中心的なものが、従来の第4班統合情報発信班を発展的に分けて、第4班地域統合情報発信、第5班実験展示、第6班理論総括研究の3つの班を編成したことである。各班には旧来の第4班のメンバーだけでなく、第1～第3班のメンバーも加え、図像、身体技法、環境・景観の各資料を活用し、研究成果の統合、体系化する方法が確立できるものと考えられる。



外部評価

問題点2 < 研究成果のデータベース構築と公開について >

資料集や研究論集の刊行、そしてデータベース構築の取り組みは、本格的には平成18年度からであるが、すでに手遅れの部分もある。計画中の刊行資料集、刊行研究論集、データベースのリストと、担当研究者リストを作成し、18年度4月から直ちに活動を開始すべきである。(八重樫)

現在、インターネットの普及により、発信情報の世界規模あるいは国家規模、分野規模のデータ規格化・標準化と世界規模での情報共有化が急速に進んでおり、こうした動向を無視してデータを作成すると、国際的な情報活動の部面で孤立してしまう恐れがある。そのため、国内と近隣国の動向について、調査、連携を行う必要があるものと考え、データベース研究の一環として18年度より着手、推進することを提案する。(八重樫)

研究の推進の方法と研究成果の公開については、ずいぶん改善されているように思われる。デジタル・コンテンツなどの制作には、民間の業者との共同開発が有効であり、現在すすめている只見のデジタル・コンテンツの完成と公開を待ちたい。(黒田)

問題点2の対応策 < 研究成果のデータベース構築と公開について >

研究全体の有機的な結びつきの弱さとともに、これまで実施した3回の外部評価で毎回きびしい注文をうける問題点は、各班の調査研究が進展しているにもかかわらず、その成果を研究世界で広く共有するためのデータベースの構築、公開が進んでいないということである。この点については、研究組織のあり方とも関係するが、個別課題においてその調査研究の成果を公表、発信する責任体制を作り、人員と予算執行もその課題単位とすることとした。その課題の責任の下でデータベースを構築し、資料の総合を行うとともに、それを基盤に各班は班の当初目標を達成していくことになる。その際、国際規格を十分考慮に入れながらその作成につとめる。

そうした3つの班で蓄積された研究成果を統合、体系化する試みとして新たに編成された第4班地域統合情報発信班では、只見を対象にしてその課題達成のための作業を進めている。そこでは、民間業者と共同してデジタル・コンテンツ化に取り組み、インターネット上で情報発信するシステムの開発を目指している。

問題点3 < 若手研究員の育成と研究支援について >

学生の教育については、各人の個別研究の成果の向上には繋がっているものの、全体の動きとRAやPDの学生の研究との有機的な協力関係が必要かもしれない。博物館実習などの教育や研修の充実への取り組みも今後の課題である。(鈴木)

現状での最大の問題点は、PDや若手研究者たちが本プログラムの中心に十分に組み入れられていないことである。若手研究者たちを本COEの研究の最前線で鍛え、かつ独創的研究の担い手としてPDや大学院生たちをいかに研究に参加できるようにするかが、本COEの成果のレベルを決定するといっても過言ではない。(黒田)

問題点3の対応策 < 若手研究員の育成と研究支援について >

これまでPD、RAについては、研究業務に従事する負担をできるだけ軽くして、自己の研究に専念できる条件を確保させるため、本プログラムの研究業務に従事する日数を週に2日(PD)ないしは1日(RA)義務付けるだけで、あとは各自の研究日としてきた。また、本プログラムの各課題への積極的な参加を求めてきたが、各人の自主的判断に任せ、制度化してこなかった。本年度から各班・各課題の研究に参画できるシステムを新たに導入し、参加する課題を登録させ、各課題では研究班員の一人として位置付けることにした。

若手育成に関しては、PD・RAの中から博士の学位を取得する者や大学の専任教員に採用される者が出るなど、一定の成果があらわれている。今後も、社会的要請に応えられる人材の育成に取り組んでいく。

高度専門職学芸員の教育プログラムの作成については、国内の学芸員、国外のキュレーター、アーキビストなどの養成に関する現地調査、資料収集を敢行するとともに、研究会や検討会を通じてその現状分析と、大学院における養成カリキュラム作りを進めている。18年度は主に国内の大学における学芸員教育の現状調査と研究会を行い、その内容を分析してまとめ上げていくことになる。

問題点4 < 今後の研究と終了後の将来構想について >

充実した施設と貴重かつ膨大な史資料の蓄積を基礎に、私立大学では数少ないCOEとしての本研究プログラムを推進できているということは、神奈川大学の誇るべき「戦略的資産」であるとの認識を新たにした。(黒田)

神奈川大学は、本21世紀COEプログラムという「金冠」の終了後も、この「金冠」を最大限に活かして、研究と教育の両面で、本プログラムの研究拠点に相応しい大学としてのステータスを形成していった欲しいし、それに恥じない研究体制の継続を展望していくべきであろう。(黒田)

本COEプログラムは平成19年度までであり、その後の維持、利活用、そしてこれらを活かした研究活動のサポートとしての予算処置が必要となってくる。平成18年度から終了後の、研究拠点としての諸施設に関する利用計画の策定に着手すべきである。(八重樫)

最終的には、デジタル・アーカイブのような形での情報の共有を構想し、検索システムのあり方を再検討し、デジタルだけでなく、アナログの発想を残していく方策を考慮すべきである。いずれにせよ、私立大学として、これだけ充実した研究活動を行っている所は数少ないので、大学側も経営の戦略拠点として、援助や協力を惜しまないことを期待したい。(鈴木)

問題点4の対応策 < 今後の研究と終了後の将来構想について >

研究メンバーは、本COEプログラムが世界に発信しうる研究拠点を構築するものとして、単に5年間で終了する研究ではないとの共通認識はもっている。各外部評価委員が指摘されるように、「非文字資料研究」は従来の研究で欠落していた重要な問題を含んでおり、今後の研究の進展により、世界的にも一段と注目される研究課題となろう。

したがって、終了後にどのような研究体制を構築するのか、終了時期を2年後に控えた現在、研究メンバーと大学関係者が真剣に検討する必要がある。本プログラムでは、拠点形成委員会と研究推進会議のメンバーによる「COE将来検討会議」を開いて討議を始めている。今後、その討議内容の結果をうけて、今秋を目処に将来構想に関する計画案を作成し、継続を視野に入れた研究拠点形成の支援を大学側へ要請していく予定である。

総括

上記のように、3回目となる今回の外部評価においても、各委員より多くのきびしい指摘があった。今回の外部評価で指摘された弱点は、これまでの本プログラムの4班編成について、具体的な研究を行う3つの班と、それらの研究成果を総合して、情報発信を行う第4班との連携が適切に機能していないこと、その蓄積した研究成果・資料を国内外で広く共有するためのデータベースの構築と公開が進んでいないこと、の二点に集約されるであろう。

そこで、第一の指摘に対しては、大幅な組織の改編を行い、従来の第4班を分けて、新たに4班地域統合情報発信、5班実験展示、6班理論総括研究の3つの班を組織することにより、その弱点の克服を図った。第二については、組織を課題別に明確化し、予算もその班単位につけることで、データベース構築の迅速化、情報発信による早期公開を目指した。また、予算も均一的に配分するのではなく、データベース化と情報発信に重点をおいた傾斜配分とした。

終了後の研究体制の確立については、今後あらゆる角度から検討を加え、世界の研究拠点として相応しい研究内容と組織作りを目指し、大学側に対しても強力な支援体制の構築を働きかけていく。





忘れられない二週間

王 欣 (浙江工商大学日本文化研究所 教員(助手)) WANG Xin

初めての日本の印象

昨年11月に神奈川大学21世紀COEプログラムの招聘により、訪問研究員として約2週間日本で調査を行った。

初めての日本は非常に感慨深かった。それまで7年間日本語を勉強し、また3年間日本語を教えてきて、本はもちろん、ドラマ、映画、テレビなどのマスメディアから日本のことはかなり知っているつもりだった。しかしやはりリアリティとしての日本を体験してみたかったのだ。

まず目に入ってきたのは、ラッシュアワーの満員電車、公園やアパートが建ちならぶ町並み、女子学生のスカート姿、どこでも鳴いているカラス、カウンターのあるラーメン屋など、それまでテレビでしか見られなかった日本ならではの風景だ。初めて本物を見たのに、なぜか懐かしい気がした。

しかし、最も感心したのは何と言っても日本人特有の優しさであった。お世話になったCOEプログラム拠点リーダーの福田先生をはじめ、指導教官の中島先生、チューターの丸山研究員(PD)、事務の長谷川さんたちは皆とても親切だった。また、寮の管理人や図書館の方、友人に紹介されたお茶の先生など偶然出会えた人たちも、皆優しくかった。

私の研究

そこで、この日本での経験を一人でも多くの中国人に教えたいと考えた。今、日本のこと、日本人のことをあまり知らない中国人が多い。同じように、中国のこと、中国人のことをよく知らない日本人も結構いる。それこそお互いの誤解を招いた原因となっているのだと思う。

私のように自分の目で日本を見て、日本人を見て、確かめることができない人が多いから、お互いを知るための宣伝の大切さは言うまでもない。その宣伝に最も重要な役割を担っているのは教科書ではなからうかと思われる。

子供が最初に触れる正式な読み物は教科書である。小学校入学から高校卒業までの12年間、子供たちは教科書を手放すことができない。教科書はどんな本よりもよく読まれ、よく使われるからである。そして、教科書に載っている写真は子供たちに分かりやすくイメージ化させる機能がある。

今回の滞在中、国立国会図書館、国際子ども図書館、教科書図書館、神奈川大学図書館、東京大学附属図書館などの図書館を利用して、中国に関わる写真が載っている社会、地理、国語、歴史などの教科書を中心に資料を調べた。まず驚いたのは、日本の教科書の種類の多さである。統一された中国の教科書と違い、日本では4年ごとに新しい教科書を発行する。

しかも、各出版社がそれぞれの教科書を出版する。もちろん、その資格や内容、部数などは文部科学大臣により決定されるし、学校によって、異なる教科書を使うことができる。

やはり歴史的にも往来が頻繁にされている国であるため、中国関係の写真は数的には多い。なかには、中国国内の教科書と同じような写真もあるが、国内で見ることのない写真もある。前者には、中国人に馴染み深い歴史上の人物や、近代中国の目覚ましい発展振りや、中国特有の風景などの写真が挙げられる。後者には、中国ではすでに歴史の舞台から消えたような風景が、日本の教科書では現在でも見られる風景として扱われているもの、中国では敏感な話題としてあまり掲載されないもの、戦争問題で両国の立場の違いから選ばれたものなどの違う写真が挙げられる。このように、「ああ、中国はこういうふうに日本で紹介され、子供たちは教わっているのか」と、調査をするにつれ、ますます興味を覚えてきた。

中国や韓国などの東アジアの国で教科書問題が取り沙汰されているが、実際には、事実を歪曲したような教科書はごく少数であり、私には見つけられなかった。それは事実として、あまり知られていないのは誠に残念である。

中国の教科書にも日本に関わる写真がたくさん載っているので、日本人にとって、どうしても理解できない点も多いだろう。今回調べた一冊の本の中に、そういう内容があった。確かに、中国人の視点から見た日本と、日本人自身が日常見ている日本と、食い違いが出るのも不思議ではない。同様に、日本人の視点から見た中国も、当然中国人の頭の中の中国と多少食い違っている。しかし、これは却ってお互いの文化を理解するいいチャンスになると思う。自分の国をもっと理解しようとするなら、他のいろいろな視点から見る必要がある。

終わりに

私が在籍している浙江工商大学日本文化研究所は、両国の理解と交流を深めようと努力している機関である。現在、人員体制は専任が14名で、内訳は教授1名、助教授4名、講師4名、助手4名、事務担当3名となっている。古代中日文化交流史、近代中日文化交流史、日本語学、日本漫画の4分野を研究している。学生数は2学年で175名である。

日本語を担当している私は、学生に言葉を教えるだけではなく、両国の文化を理解させることも大切だと思った。

(王欣氏は2005年11月8日～11月21日訪問研究員として来日。)

中国の吉祥図案と日本の吉祥図案の比較研究

尹 笑非（華東師範大学民俗学専攻院生） YIN Xiaofei

中国の吉祥観念は、長い歴史を持っている。『易・系辞下』には、「吉事有祥」とあり、すなわち、吉事があれば必ず祥がある。中国の吉祥図案は、民衆のいい生活への願いと望みを表している。中国の伝統的な吉祥図案は、種類が多く、内容がさまざまであり、その象徴とする意味は人々の生活のあらゆる面に及んでいる。民衆は自分の願望を図案で表すほか、その人生の経験、知恵と教訓をも図案に込めたのである。中国の伝統的な吉祥図案の多くは、諧音（漢字の発音が同じまたは近いこと）と象徴の手法が用いられ、四字俗語の形で表されており、絵画や彫刻などのさまざまな芸術分野で、建築、生活用品、服飾などの一部として使われている。その形式には、人物（たとえば財神や子宝を授ける観音など）をはじめ、動物（たとえば龍や鳥など）、植物（たとえば瓢箪や牡丹など）、用具（たとえば八宝や如意など）及び符号（たとえば太極や寿の字、雲などの紋様）がある。

日本で見た吉祥図案の中に、中国の多くの吉祥図案に大体当てはまるものがいくつかある。その中の一部は、ともに仏教の縁起物の影響によってできたものと思われる。たとえば、蓮の花である。これは日本でもよく使われている装飾紋様であるが、中国では、蓮の花は仏教以外の意味も持っている。その発音は「蓮」と同じで、よく桂花（モクセイ）と合わせて、「連生貴子」の図案を成している（「蓮」と「連」の発音は同じで、「桂」と「貴」の発音は同じなのである）。そして、「蓮」は「廉」と同じ発音をするほか、蓮花は泥から生まれながら清らかであり、高潔な性格を有しているとされる。それゆえ、清廉の意味が含まれる。たとえば、「一品清廉」という図案は、一輪の蓮の花から成されたものである。一品の高い官位を表すほか、清廉で公事を重んじる意味をも表している。

日本人々に好まれている吉祥図案に、中国から伝わってきたものも多くある。たとえば、亀、鶴、牡丹、「歳寒三友」の松竹梅などはこれである。しかし、筆者は日本で図案の意味を聞いたが、確かな答えを得ることは少なかった。たとえば、中国語では「蝠」

は「福」と同じ発音をするため、人々は同じ発音をする漢字の間に何らかの神秘的な関連があると信じ、「幸福」を「蝙蝠」で表すことはこの図案の意味となったのである。日本の装飾紋様でも、形が変わった蝙蝠が用いられているが、日本語の環境では、その本来の発音の対応関係がなくなる。ゆえに、蝙蝠は単なる装飾紋様に退化し、含まれていた文化的な意味は失ってしまった。一方、同じ発音に対して、日本の伝統観念の中にも、その独自の文化的体系があり、同じ発音によってできた禁忌が多く存在している。たとえば、日本人は数字の9を好んでいない。「9」は「苦」と同じ発音をしているためである。

日本では、日本特有の装飾紋様もかなり存在している。たとえば桜の花、扇、車輪などの紋様はこれである。扇は、中国の文化体系においても、日本の文化体系においても、あおいで暑気をおさめ、また火をあおる実用品としての効用のほか、芸術品ともみなされ、時には身分と品位の象徴にもなっている。しかし、日本のいくつかの芸術分野、たとえば能楽の演技の中では、扇はいつも必須の道具として脇に刺し、時々何らかのものを表しており、また招きや打撃、踊りなどの動作をする時の道具として使われている。これらの事例から、扇は日本の生活と芸術にとって欠かせない存在であることがわかる。それゆえ、人々に好まれていろんな装飾紋様で使われていると思われる。中国では、扇は縁起物としての象徴意味を持たず、中国の伝統吉祥図案の体系に入っていないのだ。（尹笑非氏は、2005年9月17日～9月30日訪問研究員として来日。）



中国年画「加官進祿（官位が昇進し祿が上がる）。右側の子供は冠をもち、「冠」で「官」を意味し、左側の子供は鹿に寄りかかり、「鹿」で「祿」を表す。その身に纏っている服装にも、菊、竹、盤長（中国結びのような紋様）の紋様が見られる。



日本の能楽役者の服装に見られる扇紋。



主な研究活動

(2006年6月～8月実施分)

研究推進会議

- 第4回 6月28日・海外提携研究機関への派遣若手研究者選考と派遣期間の変更、および訪問研究員受け入れ、第2回COE国際シンポジウムについて 他
- 第5回 7月28日・外部評価書への対応案、本プログラムの最終研究成果取りまとめ、班・課題班のデータベース構築及び印刷物等の刊行計画について 他

全体会議

- 第2回 6月30日・COE教員人事、COEプログラムの最終研究成果取りまとめ、COE終了後の事業継承・発展計画について 他

研究会

全 体

- 第1回 4月21日・各班からの昨年度研究成果報告
- 第2回 6月30日・孫 安石・富井 正憲・大里 浩秋 「租界と居留地に刻印された人間活動の営み」
・津田 良樹・中島 三千男 「環境に刻印された人間活動の痕跡解読 朝鮮の神社跡地を中心に」

班(課題)

* 課題名の表記は略称です

- 6月14日・3班「人間活動と災害の痕跡解読」 会議
- 6月16日・6班「理論総括研究」 廣田 律子 「モーションキャプチャを使った芸能の記録化及び比較研究の試み」
- 6月21日・1班「マルチ言語版『絵引』編纂」 校閲作業
・5班「実験展示」 青木 俊也 「身体の記憶 非文字資料の世界」 展示構想案
- 6月24日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」 研究会
- 6月26日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」 研究会
三山 陵(日本民藝館共同研究員) 「中国民間版画に見る庶民生活 清末民国初期を中心に」
- 7月 5日・1班「マルチ言語版『絵引』編纂」 校閲作業
- 7月 8日・3班「人間活動と災害の痕跡解読」・科研「東アジアメディア産業研究」共催 「『音』という非文字資料を考える」
野村 優夫(NHK・日本放送協会アナウンサー) 「満州国ラジオ録音盤の発見について 『音』という非文字資料」
- 7月12日・5班「実験展示」 会議
- 7月14日・6班「理論総括研究」・4班「地域統合情報発信」 合同会議 F・ルシーニュ 「只見町研究調査」
- 7月21日・1班公開研究会 藤原 重雄(東京大学史料編纂所)
「『絵巻物による日本常民生活絵引』と中世史研究 『絵引』の遺産継承の観点から」
- 7月22日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」 研究会(本誌26頁参照)
武田 雅哉(北海道大学文学部教授) 「楊貴妃になりたかった男たち 『点石齋画報』に見る<女装くん>」
- 7月26日・5班「実験展示」 公開研究会 鷹野 光行(お茶の水女子大学教授) 「大学院における博物館学教育」
- 8月 8日・5班「実験展示」 公開研究会 渋谷フィルム(DVD)上映、会議
- 8月 9日・1班「『東アジア生活絵引』編纂」 会議
- 8月10日・3班「環境認識とその変遷」 研究会(講演会・報告会)(於:鶴見大学)
宗臺 秀明(鶴見大学・神奈川大学非常勤講師) 「鎌倉・前浜 職能民のいる風景」
(中間報告)河野 真知郎、鈴木 弘太(鶴見大学大学院博士後期)
「中世都市鎌倉の景観・環境を復原するための基礎データ収集」
- 8月17日・1班「『近世・近代生活絵引』編纂」 研究会
- 8月28日・4班「地域統合情報発信」 公開研究会および班会議 佐々木 長生 「非文字資料としての会津農書」

現地調査

前田 禎彦	京都府京都市（6月1日～2日）
京都大学、京都国立博物館においてマルチ言語版『絵引』編纂発行のための追加調査	
河野 通明	長野県千曲市他（6月1日～4日）
長野県立歴史館他での在来農具の比較調査	
金 貞我	韓国 ソウル（6月7日～11日）
梨花女子大学博物館、国立中央博物館、国立民俗博物館他において『東アジア生活絵引』編纂資料の調査	
中村 ひろ子	福岡県福岡市（6月15日～16日）
九州産業大学において高度専門職学芸員養成プログラムのための調査	
河野 通明	山梨県笛吹市他（6月15日～18日）
山梨県立博物館他での在来農具の比較調査	
佐野 賢治、中村 政則、佐々木 長生、フレデリック・ルシーニュ	福島県南会津郡（6月21日～23日）
只見町教育委員会において只見町民俗行事のデジタルコンテンツ化事業の一環として、古老からのライフ・ヒストリーの聞き書き調査	
青木 俊也、中村 ひろ子	大阪府吹田市・奈良県奈良市（7月2日～3日）
吹田市立博物館、奈良大学における先進展示の視察調査および学芸員育成プログラム作成のための調査	
田上 繁	奈良県奈良市（7月3日）
奈良大学において、学芸員育成プログラム作成のための調査	
金 貞我	台湾 台北（7月5日～8日）
故宮博物院、台湾大学、中央研究院他において『東アジア生活絵引』編纂資料の調査	
橘川 俊忠	福島県南会津郡（7月30日～8月1日）
只見町教育委員会において、只見町撮影プロデュース	
福田 アジオ、北原 糸子	カナダ バンクーバー（8月4日～5日）
ブリティッシュコロンビア大学主催「Tokugawa Travel Workshop」への出席および研究発表	
中島 三千男、津田 良樹	中国東北部（旧満州国）（8月5日～14日）
旧満鉄沿線都市（瀋陽～四平）に建てられた神社跡地の調査第3班の3「人間活動と災害の痕跡解読」の事業のための調査	
山口 建治	福井県小浜市（8月17日～19日）
県立若狭歴史民俗資料館において、遠敷の民俗全般の調査	
大里 浩秋、富井 正憲	中国 上海（8月20日～26日）
上海市档案馆、上海市図書館、旧内外棉工場跡等において、プログラム中の一課程、旧租界の現状調査に関連する資料収集と現地調査	
河野 通明	韓国 麟蹄市、光州広域市他（8月22日～26日）
麟蹄山村民俗博物館、東津水利民俗博物館他において非文字資料の可能性をさぐるための日韓の農具の比較調査、および国際シンポジウム打合せ	



主な研究活動

金 貞我	韓国 ソウル、金堤市他（8月22日～31日）
中央博物館、民俗博物館、漢陽大学博物館、農業博物館（ソウル、金堤、木浦）において韓国編生活絵引関連資料調査	
福田 アジオ	韓国 ソウル（8月28日～31日）
延世大学博物館、国立民俗博物館、漢陽大学博物館等において、朝鮮編生活絵引関連資料調査、および利用申請・便宜供与の依頼	
北原 糸子	韓国 ソウル（8月28日～31日）
関東大震災関係写真データベース構築のため関連する資料所在地の現地調査	
香月 洋一郎	高知県長岡郡（8月28日～31日）
大豊町での「環境認識とその変遷」作業班の補足調査	

1班『東アジア生活絵引』編纂 公開研究会報告

2006年7月22日 於COE共同研究室

楊貴妃になりたかった男たち 『点石齋画報』に見る〈女装くん〉

講師：武田 雅哉（北海道大学文学部教授）

今回講師としてお招きした武田雅哉氏は、絵画資料をもとに「時代の精神」を読み解く仕事をことのほか得意としている。研究会では、清朝末期に発行されたかわら版『点石齋画報』に見られる女装、男装にまつわる事件を中心に話していただいた。

『点石齋画報』は当時の人々が実際にいくつかわした事件や、想像した外国の事物を驚異のままざしをもって伝えた、清末社会の息吹を感じさせるすぐれた資料である。

「画報」という名前が物語る通り、事件を報道する文章ばかりでなく、実はそれに附された、というより堂々主役を張っている挿し絵（報道画）にも事件の真実を伝えるヒントが隠されており、「画報」を読む際には、読者の絵画を読み解くテクニックもまた要求されるわけである。

研究会ではその読み解きのテクニックを伝授していただいた。また関連するいくつかの現代アートについても解説していただいた。『点石齋画報』の伝えるスクランダラスな事件や現代アートは、われわれ1班が『東アジア生活絵引』を編む作業で資料として使っている「姑蘇繁華図」に描かれた善良で秩序ある世界とはおよそ対極をなすものである。しかし両者は我々がしばしば悩まされる「絵画と真実」という深いテーマで接点をもっている。図像の解読作業においては、ややもすればこの点を忘れがちになるが、今回の研究会は原点に立ち返るとともに、このテーマを反対側から眺めてみるいい機会となった。

佐々木 睦



武田雅哉氏を囲んで

ジョイントワークショップを了えて

北原 糸子（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所 非常勤講師／事業推進担当者） KITAHARA Itoko

立命館大学と神奈川大学の双方の21世紀COEプログラムのジョイントワークショップが8月26日、27日、横浜みなとみらいのクイーンズタワー内を会場にして開催された。当初は参加申し込み者が少なく心配されたが、26日は69名、27日は83名の参加をみた。収容人員100名という会場であるから、まずは公開という目的は一度果たされた。

26日は午後1時から立命館大学グループの京都をフィールドとする考古学、地理学、歴史学の研究者による火災、水害などをテーマとする5件の発表が行われた。27日午前中は関東大震災に絞った発表3件、午後からは歴史災害と現代社会との関係を防災教育、災害と文化財、地すべり地帯に生きる日常的営為を景観から辿る試みなど多様な視点から歴史災害に迫る講演がなされた。休憩を挟んで最後は、2日間の講演を横断的に、都市、文化財、データと情報公開、防災の4本の柱を立てて討議した。

討議では、会場から、歴史災害という遠い過去からの分析から現代都市への防災について有効な問題が見つかるのか、その具体的プロセスが示されていないではないかという指摘があった。また、同時に、来るべき災害に対して防災行政では施策が講じられ、市民の自覚を促す掛け声が高いにも拘らず、市民側の動きが鈍い現状をどのように転換するのが大きな課題だという指摘と同時に、それには、ここで発表されたような過去の事実を幅広く丹念にフォローすることに意義があるとする意見が述べられた。また、「小さな災害」と日常的に向き合っている

地すべり地帯の柵田の維持の事例紹介 日常的な知恵に、防災専門家からの関心が寄せられた。

これに対して、主催した側の立命館大学COEグループからは、歴史災害像を描けても、COEの課題としている文化財、あるいは防災への具体的プログラムについては確かにこれからだとする率直な発言があった。また、関東大震災を対象とした3件の発表について、この震災の研究は多くあるようではいながら、必ずしも災害の社会像全体が描けているわけではないこと、現状では事実を正確に把握するための作業が求められていることなどが述べられた。

短い討論時間ではあったが、専門家や市民の発言に共通して、大事件、大事変としての大災害時の反応に対するハードな対策より、むしろ、日常的レベルでの「小

な災害」に対峙する現場での知恵に関心が寄せられた。このことはある意味で、“防災”という上から仕掛けられる行政に対して、生活者の側の内発性が高まらない現状を反映していると考えると興味深い。と同時にこの点にワークショップ開催の意義を示唆するものがあるように思う。

主催の二つの大学の発表者、及び関連領域で参加していただいた講演者は防災を専門とする研究者ではない。企画担当の一人であるわたしは歴史を専攻しているが、過去の資料からみえてくるのは、社会は変化するが、災害にたじろぎつつもそれを生活のなかでどうにかこなしていく人間の姿である。

神奈川大学COEにとっては、他大学のCOEグループとのジョイントワークショップ開催は初めての経験であったが、貴重な体験であった。というのは、他大学が5年間という研究期間でどのように設定課題をクリアすべく努力しているのかについて、悩みつつも共同して解決する姿を感じてきたからである。この経験は、神奈川大学COEの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という課題をどうまとめあげるか思案中のわたしたちに大いに参考となる。

最後に、公開ワークショップ開催に向けて、わが身を惜しまず力を注いでいただいた方々に深く感謝し上げたい。





受贈資料一覧（書籍・雑誌）

タイトル	発行所
国史編纂委員会『朝鮮時代通信使行録』	国史編纂委員会（朝鮮通信使文化事業会 寄贈）
日中藝術研究会編『東アジアの伝統文化・民間工芸美術 その保存と展示』	埼玉大学大学院文化科学研究科ほか（三山 陵氏 寄贈）
温州市文学芸術界連合会ほか編『温州民間芸術一百年』	上海人民美術出版社（温州市文連 寄贈）
朱 文松主編『龍湾老物件』	人民日報出版社（温州市文連 寄贈）
徐 崇統主編『耕讀楠溪』	浙江大学出版社（温州市文連 寄贈）
東京美術倶楽部編 図録『大いなる遺産 美の伝統』	東京美術倶楽部（片山 まび氏 寄贈）
中央研究院近代史研究所編『中央研究院近代史研究所集刊』41、50期	中央研究院近代史研究所（黄 自進氏 寄贈）
康 保成主編『中国非物質文化遺産 研究簡報』	中山大学中国非物質文化遺産研究中心
中山大学中国非物質文化遺産研究中心編『中国非物質文化遺産』	中山大学出版社
矢田 俊文編『新潟県中越地震と文化財・歴史資料』、DVD『山古志民俗資料館収蔵品救出プロジェクトの記録 2005年5月21日～22日』	新潟大学人文学部地域文化連携センター（矢田 俊文氏 寄贈）
瀧本 弘之編『日中藝術研究』	日中藝術研究会事務局（三山 陵氏 寄贈）
瀧本 弘之編『中国版画研究』	日中藝術研究会（三山 陵氏 寄贈）
人間文化研究機構国文学研究資料館文学形成研究系編 『近世文芸の表現技法 見立・やつしの総合研究プロジェクト報告書』	人間文化研究機構国文学研究資料館 文学形成研究系 （高橋 則子氏 寄贈）
潘 一綱編『温州青年民間芸術家作品選』	香港出版社（温州市文連 寄贈）
複製印刷画『江戸百景ほか』	（佐藤 平八氏 寄贈）
中間報告書	大阪大学大学院21世紀COEプログラム 「細胞・組織の統合制御にむけた総合拠点形成」
国際ワークショップ要旨集	大阪府立大学21世紀COEプログラム 「水を反応場に用いる有機資源循環科学・工学」
『F-GENSジャーナル』No.5 報告編、論文編	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 「ジェンダー研究のフロンティア」
ニューズレター No.1～4 『柿右衛門様式陶芸研究センター論集』No.1、2	九州産業大学21世紀COEプログラム 「柿右衛門様式陶芸研究センター」
『東アジア海域における交流の諸相 海賊・漂流・密貿易』	九州大学21世紀COEプログラム「東アジアと日本：交流と変容」
ニューズレター『漢字と文化』No.7、8 漢字文化研究年報 第一輯 国際ワークショップ「近代東アジアの情報・質と量」報告書 オープン・フォーラム「漢字文化の今3」報告書	京都大学21世紀COEプログラム 「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点 漢字文化の全き継承と発展のために」
ニューズレター No.11 セミナー報告書『高齢化社会における法秩序形成』 国際シンポジウム「Markets, Democratic States, and Regional Order」報告書 英文ジャーナル No.2	京都大学大学院法学研究科21世紀COEプログラム 「21世紀型法秩序形成プログラム」
『京大式 フィールドワーク入門』 『Land, Local Custom and State Policies』	京都大学21世紀COEプログラム 「世界を先導する総合的研究拠点の形成 フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の確立」
ニューズレター No.1	京都大学 科学研究費補助金基盤研究 地域情報学の創出 東南アジア地域を中心にして
『Frontier News』No.12、13	京都薬科大学創薬科学フロンティア研究センター 21世紀COEプログラム 「伝承からプロテオームまでの統合的創薬の開拓」
ニューズレター No.6	近畿大学21世紀COEプログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産産業支援型研究拠点」
欧文紀要 No.5 ニューズレター No.7、8	慶應義塾大学21世紀COEプログラム 「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成 多文化世界における市民意識の動態」
平成16年度成果報告書、平成17年度若手研究員成果報告書 ニューズレター No.13、14	慶應義塾大学21世紀COEプログラム 「CIRM 心の統合的研究センター」

(2006年3月～8月)

タイトル	発行所
神道・日本文化研究国際シンポジウム報告書『オンライン時代の神道研究と教育』 論集『日本文化と神道』No.2	國學院大學21世紀COEプログラム 「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」
『人文科学と画像資料研究』第1、2集	國學院大學日本文化研究所 学術フロンティア
ニューズレター No.5 活動報告書 平成16～17年度	静岡大学21世紀COEプログラム 「ナノビジョンサイエンスの拠点創成」
平成16・17年度研究成果報告書	筑波大学21世紀COEプログラム「健康・スポーツ科学研究の推進」
紀要『帝塚山学院大学日本文学研究』No.37	帝塚山学院大学日本文学会
『史資料ハブ 地域文化研究』No.7	東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム 「史資料ハブ地域文化研究拠点」総括班
言語情報学 No.4、5 言語情報学研究報告 No.9、10	東京外国語大学21世紀COE 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
ニューズレター『Wind and Effect News』No.10、11 Wind and Effects Bulletin	東京工芸大学工学研究科風工学研究センター 21世紀COEプログラム 「都市・建築物へのウインド・イフェクト」
ニューズレター No.6～11 平成17年度実績報告書	東京工業大学21世紀COEプログラム 「インスティテューショナル技術経営学」(SIMOT)
平成17年度成果報告書、2006年度パンフレット	東京工業大学21世紀COEプログラム 「フォトニクスナノデバイス集積工学」
『DALISニューズレター』No.13、14 『死生学研究』2006年春号	東京大学大学院人文社会系研究科21世紀COEプログラム 「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」
研究論集 No.4～7 BULLETIN No.6	東京大学21世紀COEプログラム 「共生のための国際哲学交流センター(UTCP)」
ニューズレター No.8	東京大学21世紀COEプログラム「心とことば 進化認知科学的展開」
第3回ワークショップ論文集	東京電機大学21世紀COEプログラム 「操作能力熟達に適應するメカトロニクス」
『CISMORユダヤ会議』No.1 『一神教学際研究』No.1 別冊、No.2 日本語版、英語版、アラビア語版 ニューズレター『CISMOR Voice』No.4	同志社大学21世紀COEプログラム 「一神教の学際的研究」(CISMOR)
研究報告集『Annual Report 2004』 国際シンポジウム抄録集	東北大学大学院医学系研究科21世紀COEプログラム 「バイオナノテクノロジー基盤未来医工学」
シンポジウム報告書	名古屋大学大学院理学研究科天体物理学研究室
報告書集 No.3～6 ニューズレター『奈良と古代』No.6、7	奈良女子大学21世紀COEプログラム 「古代日本形成の特質解明」
ニューズレター『雙松通訊』No.2～4	二松学舎大学COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」
ニューズレター No.8、9	一橋大学21世紀COEプログラム 「現代経済システムの規範的評価と社会的選択」
ニューズレター No.3 21世紀COE国際日本学研究叢書3『東アジア共生モデルの構築と異文化研究』	法政大学21世紀COEプログラム 「日本発信の国際日本学の構築」
『京都歴史災害研究』No.5、6	立命館大学COE推進機構 立命館大学歴史都市防災研究センター 京都歴史災害研究会
ニューズレター No.3 『演劇研究センター紀要』No.6、7	早稲田大学21世紀COEプログラム 「演劇の総合的研究と演劇学の確立」

Topics

貴重図書の利用

本学OBである中嶋浩氏所有の貴重な図書資料が本プログラムへ貸与されました。今後の調査・研究活動に活用させていただきます。

松本暁美、謝森展編著『臺灣懷舊』(創意力文化事業有限公司、1979年)

松本暁美著『雑学紀行・台湾』(ユーウブックス102、(有)ユーウ企画出版部、1989年)



インドにおけるフィールドワークの実践

國弘 暁子 (COE研究員・PD) KUNIHIRO Akiko

インド北西部に位置するグジャラート州、その商業中心地から100kmほど北に移動した村落地域に私のフィールドがある。その地において、ヒジュラ（両性具有としてのイメージが付与される）と称される人々と生活を共にしたフィールドワークに取り組んでいる。地理的には辺鄙な所に位置するが、ヒンドゥー女神パフチャラの巡礼地として有名な寺院があり、国内外から大勢の人々がこの寺を訪れている。

パフチャラ女神寺院をフィールドに選定したのは、寺院を活動拠点とするヒジュラとの出会いを求めたことが理由であった。グジャラート語の辞書には、「ファタダ（ヒジュラを指す民俗名称）は泣くよ、いたるところで」と、一カ所に留まることなくふらふらと移動するヒジュラの様子が表現されている。この表現の通り、ヒジュラの行動は把握することが難しく、インド政府給費留学生としてグジャラートで過ごした三年の間にヒジュラを見る機会は一度もいなかった。友人にもヒジュラについて詳しく知る者は誰一人いなかったが、パフチャラ女神寺院に行けばヒジュラと会うことができると教えられた。そこで女神寺院を訪れてみると、確かに参詣者に対して女神の恩寵を与えるヒジュラが境内にいた。ヒジュラに近づき対話を試みたが、すぐにその場から追い出されてしまった。

それから二年後、フィールドワークに臨む覚悟を決めて、再び女神寺院を訪れた。寺院裏側にあるダラムシャラ〔簡易宿泊施設〕を仮の拠点と決め、そこから寺院への参詣を何度となく繰返し、まずは自分の存在をヒジュラに認識してもらうように努めた。これが功を奏し、ヒジュラは次第に私が傍に居ることを受け入れ始めた。

その一方で、ダラムシャラを管理する老夫妻との関係は悪化の一途をたどった。女神寺院のある街は、聖なる巡礼地であると同時に、性のけ口を求める男性にとっては売春の拠点でもある。その地を一人ですらつく外国人女性は非常に目立つ存在であり、私が宿泊するダラムシャラには何人かの来訪者があつたらしい。管理人の老夫妻は次第に疑心を抱き、私の行動を監視し始めた。

或る日、寺院境内で私がヒジュラと共に女神の恩寵を参詣者に授ける真似ごとをしていると、突如そこに管理人の老男性が現われ、無言のまま目を見開いて、仰天した形相を見せた。その日の夕刻、私の帰りを待ち構えていた老男性は、ヒジュラはセックスに係る仕事をしている悪い奴らだと非難し、私に激しく怒鳴り散らした。その日を最後に街から出て行け

と命じられたのだが、その晩のこと、老人は悪気のない顔をして私に近寄り、私を性的対象と見なす態度をとった。私は臆せず老人を突き倒した。私に対するその老人の態度は、翌日から全くの他人になることを見越したものであった。

悪いイメージをもってヒジュラを見下す人は、この老男性に限らず多数存在する。その理由として、ヒジュラがインドの社会的中核をなす親族（異性愛）の規範から逸脱し、独自のルールに基づく世界に生きる点が上げられるだろう。ヒジュラは男児として生まれながら、女性同様にサリーを身にまとい、ヒンドゥー女神に帰依する現世放棄者として^{こつぎ}乞食によって生きる人々である。逸脱者の烙印を押され、異様な他者として遠ざけられる傾向にあるが、その後のフィールドワークで明らかとなるように、ヒジュラは近隣で暮らす一般の人々と同じ生活空間を共有しており、独自の世界の中だけに閉じ籠って生きているのではない。

先に述べた事情から、フィールドで行き場を失った私は、幸いにも一人のヒジュラの家泊めてもらうことになった。こうして私は、ヒジュラの家を中心とする人間関係の中に組み込まれ、街における新たな情景を目にすることになった。このヒジュラを中心とする人々の繋がり、私が当初ダラムシャラに身を置いていた頃に知り合った人々とは混じり合うことなく、両者の間には微妙な距離があった。この両者間の距離は、地域社会に生きる人々の了解の内では明示的であっても、他所者の目で捉えることは難しい。

女神寺院を中心とした街に生きる人々の間には、互いを他者として位置づける一貫した境界線があり、それが維持される限りにおいて秩序が保たれる。他所者だった私は、その境界線に向こう見ずにも跨ぎ越してしまい、ダラムシャラ老夫妻の管理する秩序を乱してしまったわけだ。

地域社会の中に深く埋め込まれた事象は、身体をもった調査者のフィールドワークによって初めて知覚可能となる場合がある。しかも、それはしばしば人間の感情が噴き出す瞬間に顕在化する。当該社会の人々と共に生きて経験知を体得するフィールドワークの実践は、調査者の忍耐と体力を要求するが、人間の隠れもない剥き出しの姿を目撃する“醍醐味”もある。私はこれからも、自らの身体と感性を随伴者として、非文字データを紡ぎ出す、フィールドワークという作業に従事していく。

調査研究協力者

本プログラムの調査研究活動を支援していただく今年度のCOE調査研究協力者に、追加委嘱された方々です。

2006年8月現在

氏名	所属部局・職名
アラン・クリスティ Alan CHRISTY	カリフォルニア大学サンタクルス校 准教授(University of California, Santa Cruz /Associate Professor)
井谷 善恵 ITANI Yoshie	オックスフォード大学オリेंट研究所博士課程修了(博士、美術工芸史)
平山 康典 HIRAYAMA Yasunori	鹿島建設株式会社 ITソリューション部 担当部長

2006年度 海外提携研究機関の訪問研究員・派遣研究員

本プログラムより招聘・派遣される若手研究者は、約2週間をそれぞれの研究課題にそって現地調査を実施します。

訪問研究員

氏名：戴 嵐 DAI Lan (華東師範大学中国民俗保護開発研究センター、華東師範大学民俗学専攻博士生)

受入れ期間：2006年7月6日～7月19日

研究課題：日本の童話に登場する少女の挿絵

氏名：曹 榮 CAO Rong (北京師範大学文学院民俗学与文化人類学研究所博士生)

受入れ期間：2006年9月2日～9月15日

研究課題：鎖国政策下の日本天主教或いは基督教信仰

氏名：吳 毓華 WU Yuhua (浙江工商大学日本語文化学院教員(助手))

受入れ期間：2006年10月1日～10月14日

研究課題：『清末民初報刊図画集成』における日本像

氏名：劉 曉春 LIU Xiaochun (中山大学中国非物質文化遺産研究センター助教授)

受入れ期間：2006年10月2日～10月15日

研究課題：人類文化研究非文字資料体系化および民俗学相關研究・資料調査学術研究

氏名：王 志恒 WONG Chi Hang (香港大学日本ドラマ専攻修士生・RA研究員)

受入れ期間：2006年10月7日～10月20日

研究課題：日本のTVドラマの制作と視聴者動向



派遣研究員

氏名：王 京 WANG Jing

派遣先：華東師範大学中国民俗保護開発研究センター

期間：2006年7月2日～7月15日

研究課題：戦前期の上海と民俗学

氏名：國弘 暁子 KUNIHIRO Akiko

派遣先：サンパウロ大学日本文化研究所

期間：2006年10月30日～11月15日

研究課題：ブラジルのトラベスティに関する人類学的調査研究

氏名：本田 佳奈 HONDA Kana

派遣先：プリティッシュコロニア大学アジア学科

期間：2006年10月1日～10月15日

研究課題：プリティッシュコロニアにおける日系移民家庭への聞き取り調査と資料収集

氏名：彭 偉文 PENG Weiwen

派遣先：中山大学中国非物質文化遺産研究センター

期間：2006年11月1日～11月14日

研究課題：日本の獅子舞を中心に東アジアにおける霊獣の舞研究

COE支援事務担当

6月より下記の事務員が担当することになりました。



小野 桂子
ONO Keiko

主に経理を担当します。よろしくお願いたします。

編集後記

ニューズレターのある編集スタッフの発案で、今年度になってからタイトルに英語表記を付記しました。それからいわばさし絵的なレイアウト感覚で、その稿がどのような内容の文章なのか漠然とでもわかるような英文をとことろにいれています。タイトルにしても逐語訳的なものではありませんし、さし絵的な英文にしても、要約でもキーセンテンスでもありません。日本語を読めない方が手にとってパラパラとめくった時、なんという研究者がどんな感じのことを書いているのか、ぼんやりとでも伝われば、と思ってつけました。小冊子ですからそれ以上のことは困難です。しかし、多少ともPRになれば、との配慮からで、試行錯誤のひとつです。(香月)

本文で紹介しました国際シンポジウムへの多数のご参加、お待ちしております。(関)

COE

第2回 神奈川大学COE国際シンポジウム

「図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く」

日時：2006年10月28日(土) 10:00～17:00、
29日(日) 10:00～17:30

会場：神奈川大学横浜キャンパス16号館 セレストホール

使用言語：日本語・英語(同時通訳)

参加：無料

氏名 住所 電話番号 所属
機関 参加希望日を記載の上、ハ
ガキ・FAX・Eメールにて事前
にお申込み下さい。

申込先：神奈川大学COE事務局
〒221-8686

横浜市神奈川区六角橋3-27-1

FAX:045-491-0659

Email:himoji-coe@kanagawa-u.ac.jp

(TEL:045-481-5661、内線3532)

プログラムの詳細は本誌16頁
をご覧ください。



主催：神奈川大学21世紀COEプログラム

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」

シンポジウム報告2

「非文字資料とはなにか 人類文化の記憶と記録」

昨年11月に開催した第1回国際シンポジウムの報告書です。

2006年6月発行 A4判 223頁(英文併記)

編集・発行：

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のため
の非文字資料の体系化」研究推進会議

シンポジウム報告3

「図像から読み解く東アジアの生活文化」

昨年12月に第1班が中国、韓国から研究者を招き開催した公開研
究会の報告書です。

2006年6月発行 A4判 83頁

編集：人類文化研究のための非文字資料の体系化 第1班

発行：神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究
のための非文字資料の体系化」研究推進会議

只見町・神奈川大学COE共催 シンポジウム

「民具は世界を結び 人と自然を結ぶわざ」

日時 2006年11月12日(日) 13:00～16:00

会場 福島県南会津郡只見町「湯ら里」コンベンションホール

コーディネーターおよび講師：佐野 賢治・佐々木 長生
周 星・河野 通明・スチュアート ヘンリ

只見町連絡先：只見町役場総務企画課 Tel.0241-82-5210

日本常民文化研究所

Institute for the Study of Japanese Folk Culture

企画展「巻物の伝える世界 職人・由緒・儀礼」

奥会津地方には、職人が受け継いできた職人巻物が多数伝わって
います。職人巻物は、一人前と認められたものだけに伝授され、
儀礼の中で使用されることで、職人にとってばかりではなく、社会
的な意味をもちました。

今回の展示は、奥会津地方における職人巻物を中心に、文書・
民俗・民具を複合的に展示します。

会期：2006年10月25日(水)～12月15日(金)

開室時間：月～金 12:30～16:30 木曜日のみ12:30～19:30

休室日：土・日・祝日

10/28(土) 29(日) 11/4(土) 11/25(土)は
開室(12:30～16:30)しております。

会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館1階 常民参考室

入場：無料

主催：「職人巻物の世界」実行委員会

神奈川大学日本常民文化研究所

共催：福島県只見町教育委員会・福島県立博物館

第10回常民文化研究講座

「職人巻物 書承と口承の交錯」

日時：2006年11月25日(土) 13:30～17:30

会場：神奈川大学横浜キャンパス2号館 地下演習室

プログラム

司会：宮内 貴久(お茶の水女子大学助教授)

挨拶および趣旨説明 13:30～13:40

佐野 賢治(神奈川大学日本常民文化研究所 所長)

(12:30～13:30 参考室において展示解説)

「奥会津の職人巻物」 13:40～14:20

佐々木 長生(福島県立博物館専門学芸員)

小松 大介(映像資料解説・神奈川大学大学院)

「猟師の由緒書」 14:20～15:00

山の神信仰の展開と狩猟儀礼

永松 敦(宮崎公立大学助教授)

「職人歌合に見る女性職人たち」 15:10～15:50

岩崎 佳枝(元帝塚山短期大学講師)

「由来の物語りから偽文書、巻物へ」 15:50～16:30

久野 俊彦(栃木県立翔南高校教諭)

質疑・討論 16:40～17:30

各研究所・研究科 問合せ

刊行物や催し物については該当する各所にお問合せください。

045-481-5661(代)

日本常民文化研究所(内線4358) 歴史民俗資料学研究所(内線4024)

中国語共同研究室(内線4525) COE支援事務局(内線3532)

非文字資料研究 No.13

発行日 第13号 2006年9月30日発行

編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
The Center of Kanagawa University 21st Century COE Program

Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

Tel.045-481-5661

Fax.045-491-0659

URL <http://www.himoji.jp/>

